
お兄ちゃんと妹のすゆことぜんぶ。

かるびーえーる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お兄ちゃんと妹のすゆことぜんぶ。

【Nコード】

N 6 2 4 5 M

【作者名】

かるびーえーる

【あらすじ】

とあるお兄ちゃんには二つ年下で高一の性に絶賛興味津々中のリアル妹がいます。どういうわけかそんな二人の下に色々な属性を持った妹が集まってきます。つまりこれはお兄ちゃんのお兄ちゃんによるお兄ちゃんのための、違った。妹の妹による妹のためのお馬鹿小説なのです。

お兄ちゃんとリアル妹

『おにいちゃま、朝ですよん。起きてくださいおにいちゃま』

「…………ん、んう？」

寝ぼけ脳に刺激を与える見知らぬ少女の声。

その声の発信源は音声の大小と距離関係からしておそらく目覚まし時計だと何となく分かる。しかし僕は果たしてこんな少女声仕様の目覚まし時計をセットしたのだろうか？答えはNOだ。おそらくまた『奴』の仕業なのだろう。僕の脳内で『奴』の悪魔の嘲笑が浮かび上がる…………忌ま忌ましいなんと忌ま忌ましい…………が、まだ時計が示すは午前三時半。学生の僕にはモーニングな時間帯、したがつて僕は寝ます。お母さん、お父さん、天国のお祖母ちゃん、お祖父ちゃん、おやすみなさい。

『あうう、ひぐう…………何で起きてくれないの？おにいちゃま…………ここはこんな起きてるのに…………はむっ、れるれ』ピッ

おっと、目覚ましは止めておきましょう。しかし『奴』には今一度厳しい教育的制裁が必要ですね。

「小夜^よ、僕の前に座りなさい」

夜、僕は朝の悪戯に対して教育的制裁のために二つ年下の妹、小夜を呼んだ。僕の声に反応した小夜はによ笑みを浮かべながら駆

け寄ってきた。嫌な笑みですね、この子が何か悪戯を思いつく時の表情です。

「うん」ペッタン

「……小夜、何故僕の太股の上にまたがるのですか？」

「えっ、まずは前戯からだよね」

「……」ペチ

「あうっ」

僕が無言で小夜の頭を軽く叩くと小夜は『うつゝ』と唸りながら涙目で僕を睨んでくる。
睨んでも何も出ませんよ。

「お兄ちゃんのばかあ！アホウ！出歯がメガネ！甲斐性無し！スケコマシ！強姦魔！」

ひどい言われようだ。

「とにかく、向かいの椅子に座りなさい。お兄ちゃんは今、モーレツに怒ってるのですよ？」

「えっ……やだ、ひどいことしないで」

「その『ひどいこと』とはどのようなことか今一度問いただす必要がありそうですが今は置いて、話は朝の件のことです」

「濡れちゃった？」

「女の子が濡れたとか言わない」ペチ

「あうっ」

僕の今までの教育的制裁は何か間違っていたのでしょうか？

僕はこんな破廉恥な妹を育てた覚えは無いのですが、あれですか。
おにいたんおにいたんと後を着いて来たおしめをしていた頃から早

十数年。今や小夜は高一、そろそろ女の子としての第二次成長が始まったのでしょうか？少しはエッチな事も興味はあると思いますか？

……

「私は濡れたよ、お兄ちゃん」

やっぱり度が過ぎると兄として僕は切に思っんです、ハイ。

「もうそれはいいです、とにかく何故あのような頭の悪い目覚まし時計を僕の部屋に設置したのですか？事と理由によってはお兄ちゃんは教育的制裁を執行しなければなりません」

「ひどいつ、お兄ちゃんは理由も無いのに見境無く私の事を疑うのね！何てひどい男！そうやって二次元の妹の事も泣かしているのね！この鬼畜！」

「……！」ビクッ

「……」

「……二次元の妹？ははっ、何のことです？」

「……」ニマッ

小夜はまた悪戯心を覚えた小悪魔的な笑みを僕に向ける。ふ、ふふ……そうですか、そういうことですか。

そのようなデマを僕にぶちまける事で僕を陥れようとしているのですね。甘い、甘いです小夜。そのような根も葉もない嘘は嘘ではなく、証拠が無ければ意味が無いのです。

「……おにいちゃまらめえ」ボソッ

「ビクンッ！」

「……そんなとこ舐めないでえ」ボソッ

「ビクビクンッ！」

「……」ニマッ

ぬぬぬぬっ……………あ、危うい。今の僕の立ち位置は断崖絶壁のギリギリで立たされるチワワと同じっ……………！

くっ、くう……このままでは、このままでは僕と妹の立場が、プライドが、社会的地位が……か、かくなる上はっ……………！

「い、今から教育的制裁をし、ししし執行しまあああす！！！！！！！！」（太極拳の構えをとるおにいちやま）

「あっ、お兄ちゃん勢いでこの場をやり過ごそうとしてるでしょ！？ずるいつ、ずるいよお兄ちゃん！」

「うるさああああい！！いからさっさと尻を僕に向けるオオオオオオオオ」

「あっ、やだっ！ホントにそれ何かやらしい言い方だよっ！あう、痛っやめてえ！お兄ちゃん！いやあ……！！！！」ペンペンペンペン

今日のおにいちやまの教育的制裁は『お尻ペンペン丸』でした。 3
0点。

お兄ちゃんと年齢不詳ロリ妹

「ねえ、ロリコン？聞いてもいい？」

「……………」

「あつ、冗談つ、冗談だよお兄ちゃん。だからその怪しげな調教グッズはしまつて、ね？」

「そうですか、それはよかった。もう少しで僕の孫の手が火を噴くところでしたよ、ハハハ」

「あは、アハハ……………変態皇帝」ボソツ

何やら不穏なワードがボソツと聞こえてきたような気がしましたがまあ空耳でしょう。小夜はちゃんちゃでおちゃめちゃんだけど極めて心が優しい子なんです。コラそこシスコンとか言わない。少しくらいのお茶目な悪戯に対しても太陽のよおな大らかな心を持った兄である僕が許容してあげないとね。

「で？小夜、僕に聞きたいことって何です？」

「お兄ちゃんってどんな妹が好みなの？」

小夜は顎に手をあて神妙な顔付きでそのようなことを僕に聞いてきた。ふむう、どんな妹が好みとな。返答に困る質問ですね…………特にリアルシスターの前では尚更です。しかし変ですね、いつもはそのような表情で案外まとも…………なのか人様によつて見方は変わりますますが、とにかく案外まともな質問などしないのに。

「どんな…………ですか。君の前では至極答えにくい質問ですがそうですね…………強いて言うならば、小夜みたいな娘ですかね」

「うわあ、無難な返答過ぎてツマンネー。というかお兄ちゃんキモイ」

「アハハ、デスヨネー」むぎゅっ
「あひつ、いいいいい！」

僕は笑顔で小夜の頬を抓った。ん？これは教育的制裁では無いですよ？お茶目な台詞を仰るお口にご褒美を与えているのですよ。飴と鞭という飴の方です。のど飴的な？

「うううう、これで孕んだらママとパパに『お兄ちゃんにのね、すっごくおつきくて……その、裂けたの』とか言って暗に近親相姦を匂わせる台詞を言ってるんだからっ。お兄ちゃんなんか禁欲の底なし沼に嵌まってホモの黒人に掘られて売られて男欲の快感に果てながらおっちね！このヤリ ン！」

本当に酷い言われようです。僕が一体何をしたと言っているのでしょうか？

「はあ、もういいよ。十分お兄ちゃんの歪んだ性癖は分かったし……じゃあ、お兄ちゃんに新しい妹を紹介するね。入ってきて」

「はいなのですよ」ガチャ

「え？ちよっ……まつ、は？え？新しい妹？」

小夜はリビングの方に向かって声を上げた。リビングのドアが開くとそこにいたのは青色の園児服を身に纏った身の丈僕の股下くらいの幼女がいた。え？何これ？何これ？

「こんにちは。貴方の新しい妹の『比奈^{ひな}』なのですよ。宜しくお願ひしますですよ」ペコリ

「あつ、はっ、これはこれはご丁寧にどうも……初めまして。僕は小夜のお兄ちゃんです」

「そうですか、よろしくお願ひしますですよお兄ちゃん」

何と幼稚園児なのにすっかりした娘だ。きっと親御さんの育て方が良かったのだろうね。うちの小夜も爪の垢を煎じて飲んで欲しいものだ。……じゃなくて。

「小夜、何ですかこれは？」

「コーフンしたでしょ？」

「僕はっ！コーフンなどっ！して！まっ！せんっ！！！圧倒的ロリ否定っ……！圧倒的ロリ皆無っ……！！」パニィ！！！！

「何必死になってんのお兄ちゃん？ホントにキモイよ」

ぐうぐうあまりの唐突な展開にお兄ちゃんの頭はついていきませんっ……！僕が頭を抱えながら悩んでいるとギョツと服が引っ張られる感覚が伝わってきたので振り向くと上目使いで無垢な瞳で僕を見つめる一人の幼女もとい比奈たんがいた！比奈たんっ……！圧倒的比奈たんっ……！圧倒的比奈たんっ……！！

「どうやら聞くとところによるとお兄ちゃんはお兄ちゃんプレイがご所望のようですね？」

「は、はえ？小夜が何やらおかしなことを吹き込んだようで、誠に申し訳ございません、小夜に代わって兄の私めがこの場をお借りしておっ」

「いえいえ、比奈も嬉しいですよ。人からたとえその愛が歪なものであっても愛されることは嬉しいものです。お礼としてパッくんチョコあげます」

「おおおお、ありがとうございます。最近のロリはレベルが高いんですねモグモグはぐっはぐ」ニッコリ

「何だか今日のお兄ちゃん是一段とキモイな……」

小夜は僕をそこいらのイシツブテを見るよおな目で見つめる。何を言ってるんだ小夜、人様から何かを貰ったらお礼を言うのが筋って

ものではないか。

「というわけでお兄ちゃん、比奈は撫で撫でを所望するのですよ」

「ふ、ふむ撫で撫で……い、色んなところを撫で撫で……」

「頭で願いますよ」

「デスヨネー」

「おーよちよちよち！おおーよちよちよち！よちよちよちよち！」
ペタンペタン

「んっ、お兄ちゃん。比奈はもっと優しく撫で撫でを要求します
です」

「（おい、誰かこの男を止めろ）」（小夜様の心の雄叫び）

僕に第二の妹が出来ました。 85点。

お兄ちゃんと年齢不詳ロリ妹（後書き）

小夜^{さよ}（16）

第一の妹。リアルシスター。黒髪ロング。

属性：悪戯っ娘

比奈^{ひな}（？）

第二の妹。幼稚園児（年齢不明）？水色ツインテール。

属性：ロリ（仮）

お兄ちゃんと巫女妹（前編）

「お兄ちゃん、お風呂上がったから入ってもいいよー」

リビングで食後の紅茶を啜って新聞に目を通してしていると浴場から僕を呼ぶ小夜の声が聞こえてきた。……一見、普通の台詞に聞こえるだろう？だが、これは我がリアルシスターの一種の僕を陥れる策略だということは長年一緒に暮らしてきたこともあってか僕の研ぎ澄まされた直感がビンビンと感じとっている。

「……小夜、リビングに来なさい」

「……………」

僕が返答すると小夜は玩具を取り上げられた子供のような顔つきで頬を膨らませて、リビングに入ってくる。案の定、小夜の格好はタオル一枚を身に纏ったあられもない姿であった。大方、僕が何食わぬ顔で浴場に入場してきた瞬間、『きゃーお兄ちゃんのエッチ！バカ！あほう！ドスケベ公大使！』とか罵り、僕を虐めるとかそんな感じの算段であったのだろう。

「……さあ、何か来世に言い残したい事でも？言い訳によっては教育的制裁を軽くしてあげる事も考えない事もないです」（孫の手を構えるお兄ちゃん）

「……………そつ、そんなつ、棒を構えてこんなほとんど裸同然の私にな、何をする気なお兄ちゃん……怖い、やだ……やめてお兄ちゃん……………私、そんなことされたら（ノノノ）」「モジモジ

「……………ふおっ」「ビクッ

……………お、おつとと、そうきましたか。

……しかし悪戯とは言え、咄嗟に何て迫真の演技をするんでしょうかこの娘は？一瞬、一瞬ですよ？ほんの一瞬……兄としての尊厳が失われるところでした……危ない危ない。冷静になるんだ僕、僕は小夜のお兄ちゃんなんですからね。小夜に対してふ、ふしだらな……いや、健全なる教育的対応をとらなければ。

「……ごほんつ、えー、小夜。先に着替えてきなさい。お兄ちゃんの教育的制裁はそれからです」

「うつ、うつ……お、お兄ちゃんのバカあ！あほう！チキンナゲツト！メスゴリラに無理矢理猥褻されてひと夏のチエリーボーイから脱却しちやえばいいんだこのチンカスマン！！びえええん！！」ドタバタドタバタ

小夜はそんな事を言い、あからさまな泣きマネをしながらリビングから退場してしまった。ものすごく酷い言われようです。ああ神様仏様、一体僕が何をしたと言うのでしょうか？

「お兄ちゃん、お湯頂きましたですよ。すごく気持ち良かったですよ。ありがとです」

小夜がリビングから退場してしばらくするとバスタオルを首にかけ、白地の水玉模様のパジャマ姿のもう一人の僕の妹、比奈ちゃんがリビングに来ました。ああ、何て愛らしい。僕は決してロリータコンプレックスでは無いのですが、そんな僕から見ても比奈ちゃんは愛らしいのです。普段はツインテなのですが、お風呂後の髪を下ろした姿なんかもう……！おっと、ごほんごほん、冷静になるんだ僕、僕は比奈ちゃんのお兄ちゃんなんですからね。……僕は決してロリータコンプレックスではないのですからねっ！

「それは良かった。お兄ちゃんは熱湯が好きでね、上せなかった？」

「いいえ、比奈も熱湯は好きなのですよ。お友達にはおばあちゃんみたいと言われますけど、自分の信念は決して曲げるつもりは無いのですよ。それができた女つてもものなのですよお兄ちゃん」キリッ

比奈ちゃんは生き生きとした瞳で僕を見つめながらそんな事を言う。やだなにこの娘、かわっこい（かわいい+かつこい）。

「それはそうとお兄ちゃん、お風呂上りなので比奈は喉がからからなのですよ。お飲み物を所望するのですよ」

「ああ、そうだね。何がいい？ミルクがいい？それともミルクがいい？あつ、こんなところにミルクが」

「ジンジャーをお願いするですよ」

「おっけー、用意するからちよつと待ってて」

僕は慣れた手つきでガラスコップに三個の比較的小さめの氷を投入し、ジンジャーエールを注ぐ。容量の七割ぐらいの量がベスト。そしてこの一連の流れの所要時間、約3秒。人はそれを『お兄ちゃんのジンジャーエール』と呼びます。

「はい、どうぞ。召し上げ」

「ありがとうございますよ……グビッグビッ……ぷはっ、くっ、最高なのですよ……！風呂上りのジンジャーは喉に独特な炭酸の刺激を与えてくれて最高なのですよ……！これがあるから妹やっていけるのですよ……！」

比奈ちゃんのご満悦の様子。良かった、お兄ちゃんのジンジャーエールが炸裂したようです。

「あ、お兄ちゃんもお湯頂いて下さいなのですよ。いいお湯ですよ、

「湯船のお湯は張りなおしましたですけど」

「……は？な、何故湯船のお湯を……？お、お兄ちゃんは気にしないよ……？むしろ嬉し」

「小夜ちゃんが『お兄ちゃん私のエキス含有の残り湯をグビグビ飲んだり、私が使った風呂椅子とか風呂床を舌でぺロぺロ味わったりするから』とか言いながら、お湯を張りなおしたり、新品の風呂椅子を用意したりしてたのですよ」

.....

[illegible]

「お兄ちゃん、泣いてもいいですよ」

「……つ、ぼ、僕は……泣いてなんか……」

「泣いてますですよ、心が」

「ひ、比奈ちゃん……びええええええ！！！！！」

「おー、よしよしなのです」

僕は比奈ちゃんの胸の中で泣いた。あまりの不甲斐無さと、自分に対するプライドをかなぐり捨てて泣いた。ああ、これが妹……優しく僕を受け入れてくれる妹なんだ……ぬくもり、僕が妹に求めていたのはこんなぬくもりなのかもしれない……

.....

「……落ち着きましたですか、お兄ちゃん？」

「……ああ、ありがとうございます。救われました……君のおかげ」

です。そして、ありがとう。僕はこの傷ついた心と身体をお風呂場で全部流してくるよ、そして忘れない。このぬくもりを……」
「いってらっしゃいなのでお兄ちゃん」

「こゝいをゆめゝみるうおひめさまは　いつか　すてきなおうじさまに　めぐりあえる」

僕は高揚したこの気持ちを胸に堂々と脱衣所に入場した。だからかもしれない、僕はこの時気付かなかったんです。浴場にいる新たな妹の存在に――……そして僕はハンドタオルを片手に堂々と浴場に入場した。

「はやーくそんなーひがきますよおに　そつと、ひとーみをとじるからー」

「……っ!？」ビクッ

「魔法をかけて」ニンマリ

「だっ、誰ですか貴様はあああああああ――――」
「……………」

「ぽうつ!」バッキイイイイイ

妹のぬくもり――ベストプライス。90点。

お兄ちゃんと巫女妹（後編）

「ごめんなさい」

「……っ（／／／）」プルプル

浴場での『キヤーオニイチャンノバカツスケベツエツチイ!』的なイベントの後、僕と謎の少女はとりあえずリビングにいた。それからというものの僕は正座で出来るだけ真摯に彼女に謝り続けた。僕の前にはその彼女がいるのだが、これが驚いた事に巫女装束を身に纏っていた。彼女は長い黒髪を白の髪留めで後ろで結っており、白き肌はまさしく神に仕える者にのみ与えられたかのように。僕はそんな神秘的な雰囲気を感じた彼女に思わず魅入っていたが、大の彼女は僕の前で正座で身体を振るわせながら、真つ赤な顔で無言で僕を睨んでいた……その対抗的な瞳が何ともそそられ、ませーんっ……！お兄ちゃんはコーフンなどしませんっ……！嘘ですっ……嘘っ……ちよっぴしドキドキしましたっ……！

「うわー、巫女さんだよお兄ちゃん。あれだよね、お兄ちゃん巫女さん大好きなんだよね。この間なんか『あの神聖な装束に僕の白き気高き子種をぶちまけて禁忌プレイを是非したいですっ……（／／／）』とか言いながら巫女さんの格好でアナニーしてたよね」

何故かその場には小夜も同席していた。ちなみに、良い子の比奈さんはもうおねんぬ中である。そして、我が妹よ。この状況下であることないことぶちまけるのはヤーメロイド。

「こっ、この変態がああああー！！！！！！！！わっ、私にそんな破廉恥なプレイをさせようとしていたのかあああああー！！！！！！！！」バシッバシッバシッバシッ

「キヤー痛いっ、痛いわっ良美！やめてあげてっ！神聖なる元巫女でお兄ちゃんを何度もしばかないであげてっ！！！！お兄ちゃん何か変なプレイに目覚めそうでフォッ！」

「いえー巫女さんもつとガンガンにいてまえ打線！ヒューヒュー」

そしてリアルシスター様が余計な事を言つた所為で僕は巫女様に股間をしはかれる破目に。その横ではさらに巫女様を煽るリアルシスター様。

「まっ、待つてくれっ……！ 今のは小夜の嘘という名の悪戯だから！ 落ち着いてお兄ちゃんの話聞いてくれ未だ名知らぬ巫女さん！」

「あ、うっ……す、すまん。ついカツとなつてしまった。申し訳ない、私の悪いクセだ……ゴホンゴホンッ（／／／）」

巫女さんは自分の行動が恥ずかしくなったのか少し赤らめた顔で咳き込み、再び僕に向かい合う形で正座する。うんうん、お兄ちゃん素直な子は好きだよ。

「えーもう終わりなの？ ツマンネー」

「小夜は黙ってなさいっ、めっ！またお尻ペンペン丸しますよっ！」

「うっ……い、痛いお仕置きはやだよお兄ちゃん」ウルウル

「きつ、貴様あああああ——！！！！！！！！なつ何だその
『お尻パンパン丸』とかいうやらしい響きのお仕置きはあああああ
あ——！！！！！！！！は、はれんちつ！はれんちはれんちは
れんちい！自分の妹に……そんなつ、そのつ……（／／／）あああ
ああもう死ね死ね死ね死ねえええええ——！！！！！！！！
死んでまえええええこのドスケベ万年窓際係長がああああ——
——！！！！！！！！」バシッバシッバシッバシッ

「きゃー誤解です誤解です誤解ですううううううん！
！！！！！！五戒なる誤解ですうううううう！！！！！！

やめてえ、元巫女でお兄ちゃんの乳首を責めるのはやめてあげてええええええー！！！！！！！！」

「はあはあ……また、やってしまった。ほ、本当にすまない……」

一通り僕の性感帯をしばき終えた巫女さんは再び正座し、謝つてきた。

「はあはあ……い、いいよお……激しかったけど……でも、気持ちよかったよお……ハアハア（／＼／＼）」

「何かお兄ちゃんのその台詞、素で気持ち悪い……」
「うう、本当に申し訳ない……」

しかし、目の前の巫女さんを見て分かった事がある。彼女はとも感情の起伏が激しいようだ。自分の感情をストレートに前面に押し出す所為か、感情をうまくコントロールできないようだ。何ともそのギャップが妹萌え……とか言ってる場合ではなく何故、我が家の風呂場にいたのか不思議なのだが。

「ねえねえ？ 巫女さんの名前なんていうの？ 私の名前は小夜。ヨロシクね」

「ああ、言い忘れていたな。ゴホンッ、えー……私の名は琴音^{ことね}という。えっと、小夜さんと……」チラッ

琴音ちゃんはオドオドとした様子で僕をチラ見する。

「初めまして、僕は小夜のお兄ちゃんです。ヨロシクね」

「え……名前？」

「お兄ちゃんはお兄ちゃんですよ？」ニッコ

「（何言ってるんだコイツ）」

「琴音ちゃん、お兄ちゃんのデフォルト名は『お兄ちゃん』なんだよ」

「で、でふおると……？な、何それ……」

「「にへー」」

「（何だコイツラ）」

お兄ちゃんに名など必要なしっ……！お兄ちゃんはお兄ちゃんであつてあくまでもお兄ちゃんに過ぎず、それ以上でもそれ以上でもない、いわばお兄ちゃんの皮を被ったお兄ちゃん……すなわちON IITYANなのだ。

「まあまあそんなことより、僕の三人目の妹誕生を祝ってパーティーでもしようじゃないか」

「なっ、何だ貴様その『僕の三人目の妹』というのはあああああ
—————！！！！！！あれですかっ！？妹プレイですかあ！？
このド鬼畜大魔王めえええええ—————！！！！！！神に代
わって巫女の私が成敗してくれるわあああああ—————！！
—————」バシッバシッバシッバシッ
「によわあああああ—————ん！！！！！！私めの失言でし
たあああああ—————！！！！！！」

「……………（そろそろウルサイ）」（呆れる小夜様）

ガチャッ

「……………何なのですか、もう現在の時刻は21時30分。良い子の皆

はとつくに就寝中なのです……………静かに、するのです、よ……………スピ
ー、スピピー」

「「「……………」」」

リビングの戸が開くとそこには寝ぼけた比奈たんが立っていた。そ
して鼻ちようちんを作り、そのまま再び夢の世界へ旅立つ比奈たん。
……………すぐく、その、器用です……………（／／／）

「こつ、このロリコン征夷大將軍があああああ—————！！
！……………！ブタ箱にぶち込んで一生出られない身体にしてやるわああ
ああああ—————！！……………！！」

「ひぎいいいいい—————！！……………！！………！らめえええええ——
—————！！……………！！お兄ちゃん激しいのはらめなのおおおおお
—————！！……………！！」

「ふぁ……………（さて、寝るか）」（欠伸をする小夜様）

僕に第三の妹ができました？45点。

お兄ちゃんと巫女妹（後編）（後書き）

ことね
琴音（15）

第三の妹。黒髪ロング（但し巫女コス時は後ろで結っている）

属性：巫女

【幕間】『妹増殖計画会議？』

闇に包まれた地下のとある一室。

そこは関係者以外未だ誰も立ち入った事の無いいわば『奈落の底』。興味本位で近寄った者は容赦なく喰われ、永遠に奈落の愚者の仲間入りとなる。

その都市伝説のような噂は瞬く間に広まり、そのいわばシークレットプレイスに挑む勇敢な猛者達が現れた。

しかし、夏草や兵どもが夢の跡――皆、無事に帰還した者はいない、敗れていったのだ、奈落の愚者たる彼らに。全てを、いや裏世界を飲み込む闇の住人もとい永遠の奈落の愚者らは今日も今日とて理想郷の実現に向けて動き出す。ゆつくりと、しかしながら着実に、確実に我々人間社会に浸透していくのだ。

『妹増殖計画』

「――それでは、第七十二回『妹増殖計画』について会議を行います」

パワーポイントのモニターの光のみの暗室。そのモニターの右サイドに立つ少女がはつきりと厳かにそう告げた。広い奥行きのあるテ

ーブルの前には人影が十三人。右側に六人、左側に六人、そして我こそが独裁者といわんばかりにオーラを放つ白ヒゲを携えたご老人が奥の中央に一人座っている。

「……よかる。それでは名波君、早速じゃが今回の対象者の説明に移ってくれんかの」

「……はい、長老」

名波と呼ばれた少女は少しの緊張からか、フーツと息を吐き一呼吸を置いて暗室を見渡す。顔は良く見えないがその場に漂う緊張感は伝わってくる。しかし奥に佇む『長老』と呼ばれたご老人は目を伏せ、少女の次の言葉を待っている。

「……では、今回の『妹増殖計画』の対象者となった人物を紹介する前に此方の我々が対象者の家の中を撮影した動画をご覧下さい」

ざわ…ざわ…

その場に緊張感が走る。それもそうだ、この計画は今に始まったことではない。数年、いや数十年前から行われてきた計画だ。これまでにその計画は老若男女問わず様々な対象者が選ばれてきたがどれもこれも失敗に終わった。ーもう、失敗は許されない。長老の周りにいる十二人の奈落の愚者らは食い入るようにジツと動画を見つめる。対象者のありとあらゆる特徴を知るためだ。人はそれを盗撮と呼ぶが、彼らにはもう後がない。そして、今回も例外なく対象者に関する動画が始まるーーー

『……………』
『……………』

最初にモニターに映し出されたのはトイレ。そこにはちょうどトイレの戸を開いた男、すなわち今回の対象者とートイレの中で便座に座っており、何が起こったのか分からないといった表情を浮かべる巫女がいた。

「「「おおおお……………！」「」」

その動画が映し出された瞬間、何人かの奈落の愚者らは一様に声を上げる。それもそうだ、今まさに我らが巫女様がトイレで放尿をしようとしている最中の風景が映し出されたのだから。

「皆の者……………！静粛につ、静粛につ……………！黙っておれっ……………！聞こえんではないかっ……………！音っ、音っ、音っ……………！年寄りのわしは耳が遠いのじゃ……………！黙っておれっ……………！」

……………何の音？と思っけていても問う者は誰一人いなかった。皆、長老の激高した表情を見るとすぐさま黙って再びモニターに映し出される動画に目をやった。

『……………つ！~~~~つ（ノノノ）』プルプル
『……………ちがっ、違っんだ琴音ちゃん。これは、その』

琴音と呼ばれた巫女の少女は真っ赤な顔で俯き、露出した下半身を装束で必死に隠している。それに対し、対象者の男は慌てふためきオロオロとしている。しかし、一向にトイレのドアを閉める気配無し。

B)

「くう……！俺達であの巫女の少女を悪鬼から救ってやれねえことがモーレツに悔しいぜっ！」（奈落の愚者C）

「琴音タン、チュツチュ」（長老）

動画が終わると、奈落の愚者らは一様に今回の対象者について意見を交わした。第一印象は最悪、どうやら今回の計画も難航する模様であつた。

「何故かイカ臭いスメルがプンプンしますが、軽くスルーして今回の対象者について軽く説明します。対象者の名は『お兄ちゃん』、十八歳で高三。女性経験は無し、いわゆるチェリーボーイです。家族構成は父、母、二つ年下の妹。但し、父は単身赴任、母は消息不明で共に両親は家におらず、対象者と妹の二人暮らしのようです」
「ちい……！それであの鬼畜メガネは自分の妹に毎日ナニをしているんだな！？なんてえやつだ！」（奈落の愚者D）

「くそお……！リア充経験者の俺でさえそんなことしてもらつた事ないのに……！」（奈落の愚者E）

「落ち着かんかつ……！今は黙つて名波君の報告を聞くのぢや！」
（長老）

名波による対象者の説明が始まるとまた奈落の愚者らがざわつき始めるが、それをなだめる長老。どうやら皆、一様に今回の対象者に対して思うところがあるようだ。

「そして、その妹というのが『小夜』、十六歳で高一。悪戯っ子属性のようです。そして、我々が送り込んだ妹、『比奈』に『琴音』。彼女らにはこの計画のことは伏せていますが、どうやら『お兄ちゃん』は着実に我々の計画に嵌まっているようです」

「……ふむ、じゃがまだわしらが今回の対象者に送り込んだ妹は二

人。まだそう急かんでもよかるう。今はまだ様子見じゃ。名波君、これからも対象者に新たな妹を送り込んでくれんかの」

「はい、わかりました長老」

「じゃあ、今日のところはこれくらいにして解散じゃの」

長老の合図をキツカケに奈落の愚者らはゾクゾクと椅子から立ち上がり、暗室から退場していく。そして、暗室に残ったのは長老と名波のみ。

「……ところで名波君、ちょっといいかの」

「……はい？」

「一発やらせてくれんかの」ハアハア

「くたばれクソ爺」

【幕間】『妹増殖計画会議?』（後書き）

長老（79）

『妹増殖計画』の代表。実は只のエロジジイ。

名波（12）

『妹増殖計画』における奈落の愚者らの総指揮者。青髪ロング。

奈落の愚者

計12名からなる『妹増殖計画』における幹部。AからLまでおり、Aがもつぱら偉い人。逆にLは最下位。元リア充、童貞など選り取り見取り。

お兄ちゃんとメイド妹（前編）

「すうううう……はあああ……… 久々に訪れる聖地の空気はおいしいなあ…… 小夜、今日は一緒に楽しもうね」
「……………」

週末の日曜日、僕は小夜を連れてオタクの聖地、AKIBAにやってきました。

というのも、アニメ『魔法処女まじかるプリン』に登場する主人公、プリン・カスタードを演じる声優、桃井林檎ちゃんもいりんごのライブイベントがここ、AKIBAで開催されるためです。ちなみに比奈ちゃんひなちゃんと琴音ちゃんも誘ったが何故か二人とも悲愴な表情でキッパリ断られたので来ていません。

「…………… ねえ、お兄ちゃん」

「ん？ 何だい？ 小夜」

「別に…… ね？ こーゆのを否定するわけじゃないけど。普通、実の妹を誘う？」

小夜は何処か怪訝な表情で僕に聞いてきました。

「それはどういう意味だい小夜？ 桃井林檎ちゃんは歌って踊って演じるパーフェクトなモエモエアイドル声優なんだよ？ ハアハア、プリンちゃん可愛いよプリンちゃん舐め舐め」ペロソッペロン

「…… 何か微妙に話の論点がずれてるんだけど。あと、休日だからって今までかろうじてひた隠しにしてきた本性をこれでもかかっていうほどこんな公の場でさらけ出すのやめてよ。実の妹の前でアニメのキャラの写真をペロソッペロ舐めるとか普通にドン引きだよ」

「休日は人間を狂わせる魅惑の刻…… さあ、己の内なる悪魔を吐き

出すのよおおおおメツデューサよ！ティンクルチンクルミラルマジカルプリーイイイ……！！ジャステイイイイイ……！！」（魔法処女プリンを呼び出す呪文）
「ちよっ！？ちよつとやめてよお兄ちゃん！見られてるよ私達！ほらっあの人なんか何故か亡くなったお祖母ちゃんみたいな優しげな瞳で見つめているよ！えっ何この羞恥プレイ！？ちよつとほらっ正気に戻ってよお兄ちゃん！」ゆっさゆっさ
「ウホッウホッウッホウホウ！ウホッウホウ、はっ僕は今まで一体何を」
「よかったぁ……！ほんともうお兄ちゃん（色んな意味で）大丈夫？」

小夜に肩を揺さぶられて僕は正気に戻ったようです。いかん、いかんですね……休日だからといってお兄ちゃんちよっぴりはっちやけ過ぎたようです。そして辺りを見ると何故かパチパチパチ……と少し抑揚の無い拍手が上がった。どうやらお兄ちゃん、小夜に心配かけたみたいです。

「ごめんよ小夜。ちよつとお兄ちゃん、あまりの嬉しさにはっちやけたみたいです。エへ」
「ちよつとはっちやけたとかそんな軽いノリで済むようなものじゃなかった気がするけど……」
「それで？さっき小夜が聞きたかったことって何ですか？」
「だっ、だからぁ……！そんな（アウチな）イベントに妹を誘うなんてどうなのって聞いたの！フツーコーユーのって同じ趣味をもった友達とか、彼女とかを誘うでしょ？」
「だっってお兄ちゃん、友達とか彼女とかいないですもの」
「今さらって言ったけど結構重いよその台詞」

まあ確かに自分一人でそういうイベントに行くのはすごく寂しい、

ものすごく寂しい、ハムスターのように死ぬほど寂しい。だからせめて共感できる人を連れて行きたいというのが僕の本音です。なので身近なシスターズを連れて行きたかったのですが……ウブで恥ずかしがり屋なのですかね。

「しかし、そう言いますけどね小夜？ そのようなイベントでは必ず自分と共感できる仲間という名の心の戦友（とも）がいるのです。ですからそのような温かな輪を広げていくことが僕の手と手を合わせて幸せなのです」

「ねえお兄ちゃん。私、喉渴いたんだけどー！」

小夜は既に僕の前、はるか先を闊歩（くわふ）していた。ふむ、いつの間に我が妹はスルースキルを見につけたのでしょうか。お兄ちゃんもう……泣いてもいいかな？

「……お帰りなさいませ、ご主人様　お嬢様　……」

喫茶店に入ると黒と白地のドレスに身を包んだメイドさん達がステキな笑顔で僕と小夜を迎えてくれた。その屈託（くつたく）のないメイドさん達の笑顔は僕の荒んだ心を十二分に癒（なぐさ）してくれる……うん、もうあれだね。メイドさんはリリンが生み出したジャパニーズカルチャーの極みですね。

「……何、こっ」

「ん？ 喉が渴いたのでしょうか小夜？ お兄ちゃんに気を使わないで遠慮なくドンドン注文しちやいなさい。お兄ちゃんはしばらくメイド

さん達の真っ白で綺麗な生足を視姦していますから」ジッ

「いや、そうじゃなくてね。ていうか妹の前で当然の如くセクハラ発言しないでよ」

「ご主人様、お嬢様、お手拭です」

しばらくすると、ロリ顔のメイドさんが純白のお手拭とウォーターの入ったグラスを席に持ってきてくれました。

「ああ、ありがとうございます……もふっ、もふもふもふもふ」

「……ちよつと、お兄ちゃん？お手拭で顔をもふもふしないでよ。行儀悪いでしょ？」

「おっと、僕とした事が、失礼。メイドさんのいいかほりが染み付いたタオルに我慢できなくつい……僕の悪い癖です」

「はあ……もおホントに私、喉乾いちゃったから注文するよ？えつと、アイスコーヒーは……って、高っ！ちよつと何コレ！？本当に高いんだけど！？アイスコーヒーに千円とかぼったくり！？」

小夜は信じられないといった表情でメニューを食い入るように見つめる。ふむ、ここはメイド喫茶のリピーター歴五年である先輩の僕が詳しい解説を教えてしんぜよう。

「小夜は………初体験なんだね」

「やめて、それ単体で言うのやめて。あと何かその含みのある間もやめて」

「ここメイド喫茶では普通の喫茶店とは違い、『ご主人様にご奉仕する』のがモットーでございます。あくまでもご主人様に悦……喜んで頂けるのが私達の喜びであり、如いてはご主人様の喜びでもあるのです」

僕がメイド喫茶について語ろうとした時、突然後ろからそんな声が

聞こえたので振り向くと、ライトグリーンでショートヘアのメイドさんが行儀よくおぼんを両手で持ち、その場に立っていた。

「う、うわっ……め、メイドさん！？い、いつの間に僕の背後に……し、刺客！？」

「驚かせてしまつて申し訳ありませんご主人様。ですが、メイド喫茶の何たるかを語るにはご主人様のようなチン スには十年早いと思います、私が説明し始めたのであります」

「ハハッ、そっかぁー。いいいいよぉー続けて」ニヨニヨ

「気付け兄よ。さりげなく、馬鹿にされていることを」

「今のはオプションのサービスでございます。ツン度二十%配合でございます。八百円加算でございます」

「そうだぞ、小夜。今のはサービスなんだ。よく覚えておきなさい」

「……お兄ちゃんがそれでいいならいいけど」

「では続きをば。そのようなサービスの延長上に当メイド喫茶ではドリンク類やお料理のメニューができたのであります」

「ふーん、で？それとメニューが高いのは関係あるの？」

「無いです。ぶっちゃけ只のぼったくりでございます」

「ぶっちゃけた！？最悪だよそれ！」

「ちなみに、ぼったくりとかそんなんはあくまでこの作品の世界の設定なのであしからず」

「？何言ってるのお兄ちゃん？」

「何、只のメタフィクションです」

「？」

……と、そんな事をしている内にもうすぐ、桃井林檎ちゃんのライブイベントが始まってしまうじゃないですか。メイドさんは名残惜しいが、今はライブイベントが優先です。

「小夜、そろそろ行きましょう」

「ちょっ……私まだ何にも頼んでないよ！」

「仕方ありません、もうすぐライブイベントが始まってしまつのですよ。早くしないとプリンプリンできません」

「もぉー、わかったよう……ごめんね、メイドさん」

「いいえ、よろしいですよ。行つてらっしゃいませ、お嬢様……」

僕と小夜は清楚なメイドさんに見送られて、メイド喫茶を後にした。さあ、今日は存分にプリンプリンしないとね。

「……行つてらっしゃいませ、私だけのお兄様」

お兄ちゃんとメイド妹（後編）

「いやー、今日は楽しかったね小夜」

「楽しかったのはお兄ちゃんだけでしょ……はあ」

あれから桃井林檎ちゃんのライブイベントをひとしきり楽しんだ僕と小夜は朱色に染まるAKIBAの街並みを眺めながら歩いていました。夕暮れ時でもAKIBAは活気を失うことなく、行き交う変態紳士の皆様は活動に勤しんでいますね。僕も他の紳士を見習って買い物が続けたいのですが、そろそろ帰還しないとお家で待っている子猫ちゃん達がぼんぼんをクークー鳴らせて今か今かと晩御飯を待っていると思いますからね。お兄ちゃんは大変なのです。

「今日はイベントの他にも数々の戦利品も購入できましたし、お兄ちゃんはハッピーマンです」

「私、お兄ちゃんに堂々といつちい本のコーナーに連れて来られたときはちよつとぶつ殺そうかと思ったよ」

「小夜、本ではないのです。同人誌とお呼びなさいっ！」

「どっちでもいいよそんなの。あとうるさいし。それだけでもアレなのに……何これ。セクハラ？」

小夜はいつの間に僕の手提げ萌袋から抜き取ったのか、一冊の同人誌の表紙を僕に見せつけてきました。タイトルは『お姉ちゃんと弟のすゆことぜんぶ』。表紙は大量のザメンが顔面にぶつかかっているツインテの美少女のドアップ。それに加え彼女の扇情的な笑みがますます僕のようなエロガッパを惹きつける要因となっている一品です。

「小夜、それはすんばらしい同人誌なのですよ？お姉ちゃんと弟

の様々なエロティックシチュエーションがその一冊にキュ〜っと濃縮されているのです……必要以上の बीचクペロペロから始まり、愛の亀甲縛り、愛のアル責め、黄金水放射、おっお姉ちゃん……！僕、そんなところ入らないよ〜っプレイなどなど……ドMの変態紳士には堪らない一品に仕上がっているどりーむかむとぅるーなのです……ふう」

「アハハハ」

僕が同人誌の内容の説明を終えると、小夜はレイプ眼で僕を見ながら何故か声を上げて笑っています。何がおかしいのでしょうか？ここはお兄ちゃんも笑うちやうところなのでしょうか。

「ハハハハ！アハハハハ！」

「アハハ！アッハハハハ！」

「うひゃひゃひゃ！ブヒヒヒヒ！プギヤー！げほっげほっ」

「笑ってる場合じゃないよ」

「ごめんなさい」

何故か今度は真顔で叱られました。お兄ちゃんちよっぴり反省。

「お兄ちゃん？私は本気でお兄ちゃん（の頭）を心配しているんだよ？」

「心配？何を心配するのです？それよりおっぱいを心配した方がいいですよ」

「うまいこと言っただつもりか若ハゲ」

小夜は真顔のまま、淡々とした口調で言う。お兄ちゃんちよつと傷ついちゃいました。シューン。しかし良かったです。これは好感度-100といったところでしょうか？小夜は『おにいちゃんのあほお！えっち！ばかぁ！（／＼／＼）』とか言いながらぶんすかぶんぶ

んと怒ってはいませんが、小夜の僕を見る目はこの世の生を受けた者を見るソレではありません。ちよつとツンツーンとかそんなレヴェルでもありません。そんな冷たい瞳にちよつと下の方がドキドキしたお兄ちゃんなのでした。

「ほら、さつさと帰るよキモメン」
「はい」

「お帰りなさいませ、ご主人様、お嬢様」
「……………」

お家の玄関の扉を開くと正座で僕らを向かえるメイドさんがいた。彼女は無表情ながらも上から身体一つ一つのパーツがバランスよく整っていて、まさに成人女性の鏡といった感じの女性だ。

「何、魅入ってんのお兄ちゃん？」

小夜は怪訝な表情で僕を見据える。
いけない、お不埒な思考はいけません。僕は変態という名の紳士……。

ここは落ち着いて素直な僕の気持ちを紡がなければ。

「メイドさん」
「はい」
「僕の膝裏にキスしてもらえませんか？」
「何言ってんの!？」

小夜は『何？お前馬鹿じゃない！？』のような台詞の籠った瞳で僕を見つめる。

失礼な、僕は素直な気持ちを紡いだまで……それなのに、そんな今にも射殺すような瞳で見つめるなんて……ひどい、ひどい……です、もつと……こんなお兄ちゃんを見てくださいませ。

「はい、ご主人様のご要望とあらば……」

メイドさんはお上品にスカートの裾をちょうど太腿の付近まで両手で持ち上げ、僕の前で美脚を露にする。

こ、これは素晴らしい……足の素肌は彼女の着用している白のオーバーニーソックスのせいであまり露出されていませんが、それが何ともそそられるのです。『今から僕が彼女のニーそくすを無理矢理脱がすのです……ああ、その先には美肌の黄金卿……』そんな、高揚とした気分になるので……ああ、いけません。僕のおぼっちゃまがによきによきと目覚めてしまいました。不埒です、ああ不埒……メッ、お兄ちゃんのメッ。

「ウフ、ウフフ……ちゅっちゅっしても……いいですか？（／／／）」

「はい……ご主人様の唾液でしつとりと濡れた唇で碧の膝裏にマーキングしてくださいまし……（／／／）」

「何コイツら、すんごいドン引きです」

小夜は僕とメイドさんから少し離れ、膝裏ちゅっちゅっプレイを見守っています。

ふむ、しかし……膝裏にちゅっちゅっするにはオーバーオナニーソックス……おっと、じゃなくてオーバーニーソックスが邪魔になりますね……。僕は彼女の足元に犬のように四つん這いで這いより、両

手でニーソックスに触れます。

「あっ…………ご、ご主人様」

「…………これ、邪魔だワン？クンカクンカ…………ハフッハフッ」ズルズル…………

「あ、ああ…………ご、ご主人様あ…………そんな、犬のように碧のニーソックスを嗅がないでくださいまし…………」

「キャフツ、キャウウン！僕はっ、本能のみに生きる犬ですワン！」
「何コイツラ、すんごい殺したいです」

ああ！早くっ、早くこのニーソックスを剥いて、彼女の膝裏をペロペロしたいっ！

僕は噴火しそうな欲望を抑えきらず、一気にニーソックスを剥きにかかります。

「…………き、貴様あ」ぷるぷる…………

「おお、お兄ちゃんがワンちゃんになっていますです。比奈もワンちゃんなんですワンワン」

おっと、奥のリビングから琴音ちゃんと比奈ちゃんもご登場のようです。

しかし、やめられないとまらない。今の僕は欲望で支配されたお兄ちゃんという名のお犬さんなのですワンワン。

「ハッ、ハッ、ハフツ、早く膝裏ちゅっちゅっさせるワンワン！」

「いやあ…………ご主人様…………碧に乱暴はお止めくださいまし…………」

「ちゅっちゅっちゅっちゅっ」

「いつまでやってるかこの駄犬があああああ……………！！！！！！」

「キャン！」バキッ

「……で、貴様。何か現世で言い残したい言葉はあるか？」
「……あつ、この首輪……ちょっと興奮します……（／＼／＼）」

リビングにて。

僕は首輪をかけられまさに本物の犬気分……つまりは琴音ちゃんに僕の身体を蹂躪されているところといった状況なのです。

「貴様あ！人聞きの悪い事を言うなつ。誰が貴様の身体なんぞ弄ぶかこのつこのつ！」ペンペン！

「ああ！うつ！痛い！いったあい！お尻をペンペンされるなんてアタシ何年ぶりかしら！何年ぶりかしら！見られてるっ！あたし妹達に見られてるう！」

「休日モードのお兄ちゃんは何をしてもきもいね……」

「ワンワン、ワンワンなのです」

妹達に白い目で見られるこの快感……。

ああっ、恥ずかしい！アタシ、何てふしだらな事を！だめっ、早く平日お兄ちゃんモードにもどらNIGHT！アタシ、どうにかなっ
ちやうよおー！

「はあはあ……すごい、すごいわ……」

「あの……ご主人様、そろそろ……碧の話を聞いてもらえますでしょうか……？」

メイドさんは無表情で僕に尋ねる。

ふむう、しまった、彼女のことを忘れていたね。彼女が何故、僕の家で待機していたか。かつ、何故彼女の膝裏から濃厚なふえりもんが漂っているのか……僕は家主としてそれらを知る権利があります。

「ふむう、それじゃあ……まず、君の好きな体位を僕に教えてもらえるかな？」

「一回、死んだ方がいいよお兄ちゃん。エロゲーのやりすぎなんじゃない？」

「ワン、ワンなのです」

小夜は僕をゴミ虫でも見るかのような目つきで睨んでいます。

比奈ちゃんは比奈ちゃん、犬プレイが非常に気に入ったのか、リビングのソファアの周りを四つん這いになりながらグルグル回っています。

「碧……それが私の名前ですご主人様。ご主人様も気軽にそうお呼び下さいまし。以後お見知りおきを……」

碧と名乗ったメイドさんは丁寧に御辞儀をしてそう自己紹介する。あらやだ、何て躑のいきとどいたメイドさんなのかしら。アタシ、キyunと色んなところ（主に下半身）がときめいちゃいますわ。

「そうか、碧ちゃん……でいいのかな？碧ちゃんは、格好から察するにメイドさんだね。AKIBAのメイド喫茶でさっき僕と小夜に会ったけれど……アルバイトをしているのかな？」

「いいえ。碧はツン二十%デレ五十%クール十%ヤン二十%配合の真性のメイドでございます」

「真性の……メイド？それはどういう意味だ？」

ずっと僕をキツと睨みつけていた琴音ちゃんは碧ちゃんに尋ねる。

「言葉の通りでございます琴音様。私自身で語るのも何ですが、私は体だけのメイドではなく心身ともにご主人様に身も心もお仕えするメイドたるメイド中のメイド……すなわち、真性のメイドということでございます」

「真性の……！」

「メイド……！」

メイドさんがそう答えると小夜と琴音ちゃんは目を丸くして、何と答えたらいいのかわからないのか押し黙る。
そして次に二人は僕に視線をやり……。

「真性の……！」

「ロリコン……！」

「ワンワンおーなのです」

失礼な方々です。

僕のどこがロリータコンプレックスなのでしょう？見てください、この純粹無垢なメガネ的少年を……。

ほら、見なさい……僕の目は輝いているでしょう……？

「薄汚くてとても濁った目をしてるねお兄ちゃん」

「……ところでメイドさん、僕に話って何かな？」

僕はメイドさんに話をふる。

まさか、話が自己紹介というだけではないでしょう？彼女がわざわざ聞いてほしい話は他にもあるはずです。

「ご主人様、どうか私をメイドとしてご主人様の側に置いて下さい

ませ……」

「いいですよ」

「ぶっ！」

「ぶっ……！」

僕がそう答えると、小夜と琴音ちゃんは飲んでいた紅茶を噴出しました。

コラコラ、お行儀が悪いですよ。

「お、お兄ちゃん……！？な、何考えているのカナ……！？」ギリギリ……

「き、貴様……！」ギリギリ……
「ワンッワンッ、なのです」

小夜は口元をヒクヒクさせ、そして琴音ちゃんは殺意の籠った目で、二人して僕の首を絞めてきました。

ぐ、ぐう……や、やめて。お兄ちゃん、そんな特殊なプレイは好き……です。

「この身寄りのない薄汚い野良メイドの碧をどうか、どうか……ご主人様、拾ってくださいまし……」

碧ちゃんは胸の前で両手を組み、うるうると瞳に涙を溜め、僕に乞います。

「わ、わかった、ぐう……じゃあ条件として……！」

「条件として……！？」

「キャンキャン、これがかぁいいのです」

ますます、目力が強くなる小夜と琴音ちゃん。

こ、ここは下手な事を言ったら死亡フラグが立ちそうです……！ 慎重に答えないと……！

そして僕は一呼吸置き……。

「『ご主人様』じゃなくて、『お兄ちゃん』って呼んでねっ！」

「死ねええええええー！！！！！」

僕は設定のいう名の神様の陰謀に逆らえず、そのままブラックアウトしました。

お兄ちゃんとメイド妹（後編）（後書き）

碧^{みどり}（26）

第四の妹（？）。メイドさん。ライトグリーンのクセ毛のショートヘアー。

属性：真性メイド

お兄ちゃんと吸血鬼妹（前編）

「……ストライプ、クマさん、ピンク、Ｔバック……ふう」

「……お兄ちゃんさあ、妹のいる前で洗濯物の下着見ながらニヤニヤするのやめてくれない？ 軽くセクハラだよ？」

朝食時。

僕は味噌汁を片手に庭に干している雨風で濡れた妹達の下着を鑑賞しながら息をついた。

ちなみに下着は小夜、比奈ちゃん、琴音ちゃん、碧ちゃんの順です。しかし、ふむふむ、碧ちゃんは清楚な顔してなかなか痴激的な下着を穿きますね、ごっくん。

「フッフ……いやあ、この数日で随分と我が家も賑やかになったなと思ひましてね。お兄ちゃんは感傷に浸っていたのです……ふう」

「下着で感傷に浸られても……何かキモイだけだし。でも、失敗したなあ……天気予報は今日は晴れって言ってたのに、これだもん……」

…もう今更遅いけど、部屋に洗濯物取り込むね」

「ご主人様、ご飯のお代わりはいかがですか？」

そして、昨日に僕の四人目の妹となったメイドさんの碧ちゃんは上目遣いでご飯のお代わりを勧める。

フリフリピンクのエプロンを身につけた碧ちゃんは、ご飯のオカズとして食べちゃいたいくらい可愛らしい僕の妹なのです。『メイドとしてご主人様に仕えるのは当然ですから』とか言っつて、裸エプロン姿で調理していた時は精神的にも肉体的にも二重の意味で悩殺されそうになりましたがね（後者は主に第三者に）。

「ああ、お願いするよ……。ところで、碧ちゃん？ 僕の事はご主人

様じゃなくて、お兄ちゃんと呼びなさいと言ったでしょう?」

「あ……。ご、ごめんなさいご主人様……私、私……」

碧ちゃんは僕が怒っていると思ったのか、両の瞳からポロポロと涙を零し、美しき白き肌を濡らしていく。

違うのです、碧ちゃん。僕は別に怒っているのではなくて、せつかく家族になったのだから、そんな他人行儀にならないでほしいのです……。

「……ペロツ、泣かないで下さい碧ちゃん。僕は怒ってないよ……ただ、我が家にいる間だけは親しみをこめて僕の事を『お兄ちゃん』と呼んでほしいだけなんだ……だから、泣かないで」
「ご、ご主人様…… / / /」

僕は彼女の両の瞳から零れる聖水を人差し指で拭い、その指先を舌で舐めとった。

……うん、塩味が効いてておいしいな。僕は妹を泣かせてしまったのだから、お兄ちゃんとして泣き止ませる義務があるのです……。

「……ふっ、ふふ……朝から実に不愉快な光景を見せ付けてくれるな貴様は」ぷるぷる

僕の向かい側の席にいる琴音ちゃんは口元を引きつかせ、身体を震わせています。……? しーしーを我慢しているのでしょうか?

「……琴音ちゃん? もしかして、嫉妬……アイタツ、デッ、デスヨネー、シヨンナワケナイデスヨネー」

「……はあ、私は低血圧だ。頼むから、朝から怒らせるようなことをしないでくれ……」

琴音ちゃんは僕の眉間に向けて、箸を突き刺しました。

う、うーん……これが俗に言う、『天然つんでれ』という属性なのでしょうか……。

「？お兄ちゃんと小夜ちゃんいつもと服装が違いますです……今日は何かあるのですか？」

ロリっ子の比奈タンは口元にご飯粒をつけた愛らしい顔で僕と小夜に向かって尋ねます。

「……チュパツ、んむ。今日はお兄ちゃんと小夜は学校に行かないといけませんのです。通常は男子は裸ネクタイに裸メガネ、女子は裸リボンに裸ニーソが正装なのですが今は真ぬふお」ミチツ

「うちのガツコの制服可愛いでしょう？比奈ちゃんも大きくなったらうちのガツコ来なよ。毎日この制服でガツコ通えるよ」

「おお……オサレです。オサレ制服を身に纏って、比奈もお姉ちゃんのオサレガツコに行きたいです」

比奈タンは希望に満ちたキラキラした瞳で制服姿の小夜を見つめています。

フ、フフ……お兄ちゃんは我がリアル妹の睾丸足裏マッサージ（イケナイ行為の方ではありません）のダメージのせいで絶頂しそうですよ……ヘッ、ヘヘ……ウヘッ。

「うわあ、何っ……お兄ちゃん？そんな朝からそんな口からだらしなく涎を垂れ流して……。アへ顔を私に見せないでよ！もうキモイ！ホント、キモイもう！」

「き、貴様あ……ど、どうやら貴様は本当に死に急ぎたいようだな……」ぷるぷる

我が妹は実の兄である僕をまるでその辺の道端に侘しく生えているタンポポを見るような瞳で見つめてきます。

一方、味噌汁を嚙っている琴音ちゃんも箸をテーブルの置き、懐から何かを取り出そうとしています。

ウフフ、何でしょうか、この理不尽。でもそんな理不尽な妹の行為も僕はすんなり気持ち良くてたっぷり受け入れるのでしよう。気持ちよくたっぷり受け入れるのでしよう（大事なことなので二回言いました）。だってお兄ちゃんなんだモン。

「モグムグモグムグ……我ながら、今日の白米の炊き加減が絶妙でございます、もふもふ」

「碧ちゃん、タイ米のお代わりお願いするのです」

「比奈様、タイ米ではありません。正しくはブレンド米でございます」

【side sister???】

雨天のとある住宅のとある一室にて。

イケナイ本やイケナイ道具一式やイケナイゲームやイケナイティッシュが散乱している部屋に小柄のいわゆる幼女体系で赤髪ロングの女の子と金髪のロン毛マンがいた。それを人はよそ様の住居侵入と呼ぶが彼女らは気にしない。

「又ハハハッ、ここが今回の雄豚の豚小屋と言う訳だなっ小次郎！」
「メル様、雄豚ではございません……正しくは、『対象者』かと。そして私は貴方に仕えるメル様の白濁液で汚れた薄汚い雄豚かと」

ナデナデ

小次郎と呼ばれたロン毛マンは笑みを浮かべまるで我が子の頭を撫でる様な手つきで優しく、メルと呼ばれた少女の尻を愛撫した。

「ひっ、ひゃっ……なっ……！何、勝手に私の高尚な尻を触ってんだボケエ！」

「触る、ではなく正しくは愛でるか」とナデナデ

「うっうるさいわっ……ひゃっ、いいいいいつまで触ってんだ変態野郎！」

「変態野郎、ではなく正しくは変態紳士かと」ナデナデ

「うっうるさい……！真顔で反論すなっ」

真つ赤な顔で抵抗するメルの表情を見た小次郎は繭を八の字にしてガツクリと頭を垂れ、洪洪とメルの尻から手を離れた。すると、小次郎はおもむろに己のズボンのチャックに手を触れ、下げる。

「メル様、そろそろ私めの肉棒を準備してもよろしいでしょうか……？」
「……ジ―」

「なっ何だ肉棒ってえ！うっうわっ！何故チャックを下ろす！？わ、私に汚いブツを見せるなっ……！」

「何故と申されましても……メル様が求めたものですから」

「も、求めとらん！そんなえげつないもの！お前は私の何なのだ！」

「愛玩具（夜間専用）かと……ぽっ／＼／」

「よし、齒を食いしばれ貴様あ！一生、高野豆腐も食べられぬように粉々に力チ割ってやるわあ……！！！！！」

小次郎は『ちっ』と舌打ちをし、仕方なく一度取り出した己の肉棒をしまう。

その際、『今お前、舌打ちしただろっ！？』とか横で色々とかちや

「ごちゃ聞こえてきたが、小次郎はキツパリ無視して無事、愚息を鞘に収めた。」

「ふう……メル様、そろそろ対象者のご対面された方がよろしいかと」

「急に営業面になったな貴様……まあ良い。ご対面？ふふんっ、バカモノ。吸血鬼の私が何故、下等な人間共と対面しなければならぬのだ？馬鹿馬鹿しい……」

「メル様、その鼻の抜けるような偉そうな鼻音は下品かと。あと高飛車のような馬鹿面とキンキン声が大変鼻につきますので即刻止めた方がよろしいかと」

「うわああああん、何なんだ貴様は！さっきから何様なんだ貴様は！帰れえ！給料ドロボー！」

「メル様の眷属けんぞくでございます」

眷属とは……。

一般的には血縁者、つまりは親族や一族を指すことが多いが、ここと言う眷族とは少しばかり違う。

不死族の一種として人間の生き血を糧に生息する吸血鬼はその性質からか、この世を生涯共にする友の存在がない。そのため、必然的に孤独を愛し、孤独を糧に生きる。しかしながら、中には当然孤独を忌み嫌う吸血鬼も存在する。そのような吸血鬼はこの世を共に生きる友を求めて、人間の生き血を吸い、その人間を吸血鬼化することです。絶対の友”を作る。それが小次郎が言った眷属である。

絶対の友と言えば聞こえは良いかもしれないが、要するに体のいい下僕である。

何故ならば、眷属は必然的に吸血鬼を主人として崇めなければならず、主人の言う事は絶対従わなければならないからだ。

「……だつたらチューチュー吸わせろお。ここにストローもあるから」

「嫌です」

「うわあああん！もう死ねお前！とつと私の前から永遠に消え去れカバーーーー！！」

「嫌です」

「お、お前はホント何なんだ！？嫌がらせか！？もしかしてそれは嫌がらせなのかっ！？」

「ハハハ、嫌がらせだなんてとんでもない。人間きが悪いですよメル様。嫌がらせではなく、正しくは愛のある嫌がらせかと」

「お前のような失礼な優男なんぞの愛なんか欲しくないわハゲ！そんなもんどブ川に捨ててやる！」

「じゃあ嫌がらせで」

「うわあああん！お前、もう帰れよお！頼むから帰ってくれよお！」

……。

まあ、絶対に吸血鬼と眷属の関係が主人と下僕であるとは限らない。

メルと小次郎のように人間とチワワがじゃれ合っているような仲の良い関係を築けている場合もある。

というより、吸血鬼の中にも階級があつて……（中略）……要するに、メルはまだ吸血鬼としては幼いというより、低レベルな存在なのだ。

「さて、メル様いぢりもこれくらいにしておいて……。メル様、我々は例の計画のためにここにやって来たはずです。……対象者に会っていたかかないと何のためにここにやって来たのか分かりませんよ」

「もついい、お前の失礼なヴォケには金輪際、つつこまん。嫌だよ」

……何で私がこんなブサイクなメガネマンの妹にならなきゃならないんだよう……大体このふざけた計画の立案者はあのセクハラおやぢだろう？私のはあのファゲおやぢの言いなりなんて絶対聞きたくない！ヤダ！絶対ヤダ！！」

メルは対象者の顔が映った写真を明後日の方向に放り投げ、部屋の畳の上で仰向けで横になり手足をばたつかせる。

その姿は傍から見れば、赤ちゃんが『まあー俺っちに生乳ーくれようー』と駄々をこねているような感じだ。

「子供ですか貴方は……ですが、今朝メル様はノリノリのアフォ面でこの家に侵入したじゃないですか」

「お前今軽く私の事を馬鹿にしたらどう。まあいい……ノリノリだったのは、あれだ……気分だ、気分。笑ともでも初登場だと何か浮かれる彼奴がいるだろう。あれと同じなようなものだ」

「プツ」

「笑うなばかあ！！」

メルや小次郎がこの部屋に外から侵入できたのは本日の天候が雨天であるためなのは言うまでもない。

吸血鬼や眷属は太陽の光を忌み嫌い、触れると死滅してしまうからだ。それは太陽の光の強弱によってダメージは多少変化するが、弱点ということに変わりない。

「……ところで、小次郎。私は腹が減ったぞ」

「飲ませませんよ」

「貴様という奴は私の眷属のクセに何ちゅー主人を大切にせん奴なのだ……。まあよい、今は血的なモノが欲しいのではない。腹が減ったのだ……。さっさとメシを超越すのだ小次郎」

ちなみに、吸血鬼は糧は血だけである。
基本、吸血鬼は人間の餌は食べません。あしからず。

「どうぞ」

「お前にはそのくしゃくしゃに丸められたティッシュが食べ物に見えるのか！？うわっ、なんだこれっ、くさっ、イカ臭っ！何だこの不快なブツは！！さっさと捨てんかそんなモン！！」

「くんかくんか……。うーん……。懐かしいスメルです。香ばしいですな」

「香ばしいものか……。う、うえええ……。気分悪……。その変なスメル嗅いだせいで一気に食欲なくなった……。私はぐでえーつと横になるうう……。そして寝るう。どうせ、今日は雨だけど昼間は行動する気も起きんし……」

「お休みなさいませ、良い夢を……。あ、しまった。メル様……」

「スー……。スー……」

「……おやおや、もうおねんねしてしまいましたか。……。まあ、可愛い寝顔に免じてこのまま寝かせときましようか。それに、この方が何かと計画に都合が良いですからね」

小次郎はそう言いながら、部屋の窓枠に足をかけ、ベランダに移り、雨の街中に消えていった。

お兄ちゃんと吸血鬼妹（後編）

【side midori】

ご主人様にご登校されている昼間にお家のお掃除をしましょう。

真性メイドシスターとして雇って下さったご主人様に私はこの身を奉仕しなければなりません。

元より真性メイドとはご主人様のご要望のみならず自ら主体性を持つて行動しなければたちまち段ボール箱にポイツされちゃうかもしれません。碧はもうあの頃のような捨てメイドに戻りたくはないのです……。

「……っ、さあ、お掃除しましょう」

私は少しこみ上げてくるものを覚えましたが、気を取り直して右手に掃除機を、左手にゴミ袋を装備し、二階へ向かいます。というのも私が最初にお掃除するべき場所は何処かと考えた結果、ご主人様のお部屋がすぐに思い浮かんだのです。ご主人様のような性少年にとって、ひとつやふたつ人に見られたくないものもあるでしょう。

ですが、それはそれ、これはこれ、あれはあれ、メイドにとってご主人様のプライベートは存在しません。そんなものよりも大切なことはご主人様のお部屋から太郎がわんさかもっこり大量発生する前に駆逐、もといお掃除しなければなりません。真性メイドは太郎とセロリー君は大嫌いなのです。

「本日のお掃除拠点に到着しました」

私は『おにいちゃんのおへや』と書かれたプレートの貼られた扉の

前までやって来ました。

ここがご主人様のハウス。ここがご主人様の檻。ここがご主人様の愛の巣。

私はさっそく、ドアノブを回し手前に引きます。

「……んっ、んっ……んう……あ、あれね？」

開きません。開け柚子胡椒。開きません。

不思議に思った私はドアノブによくよく視線を送ると鍵穴を発見しました。とすると、ご主人様はこの扉を施錠しているということになります。……お部屋の中に見られたくないものがあるのですね。仕方ありませんね……。

「ソオイ！！」ヴァキ！！

私は扉に正拳突きをお見舞いしました。ちょうど拳分の穴がすつぱり開き、外側から中に入ることができるようになりました。少しランボーになりましたがこれでようやく心置きなくご主人様の豚小屋を思いつきりお掃除できるといわけです。私は穴に手を入れ、外側から開錠しました。

「……こほん。ご主人様、失礼します」こんこん

私は丁寧にお辞儀をし、ドアノブに手をかけ手前に引きました。メイドとして、ご主人様の部屋に侵入する際は三回ノックと失礼しますは基本中の基本です。それはともかく、今度こそするつと気持ちよく扉は手前方向に開きました。……何故か少し高揚感。私はそのままご主人様の豚小屋に侵入し、お部屋の光景を目の当たりにしました。当初の予想通りの散らかりようにまた少し快感。

「……むう。しかし、これは本当にどこから手をつけたら良いのでしょうか」

そこらじゅうに転がっている謎の丸められたティッシュ。ゴミ箱にも何故か大量に丸められたティッシュで溢れかえっています。思春期の男の子のようにエロ本を隠す、といったことも面倒なのか隠すきさらさらないのかこれ見よがしにベッドの上に散乱しているエロ本。やはりご主人様はド変態ですね、実に良いことです。性に明け暮れた男の子は定期的にアッーしなければ根っこから腐っていくとのこと（まあ、真っ赤なウソなのですが）。それに手の運動にもなりますし、絶頂に上る瞬間、エレクトを発すると昔、パパ様から聞いたことがあります。大いに結構、エレクトボンバー。

「……ですが。まさかご主人様がダッ　ワ　フを所有していたなんて……」

「くかーくかー」

驚きです。びつくらこんです。

部屋のフローリング仕様の床に寝そべって、可愛らしいびきをかいている幼女を一匹発見しました。

……マッパで。

「……とりあえず。たいーほ！これはたいーほだっ！ぴっぴっぴー！」

「くかーくかー」

とりあえず、驚いてみました。

むむむ、しかしこれはまたレヴェルが高いですね。等身大の局部穴あきダ　チ　イフまでは予想していましたが、まさかリアルダッ　ワ　フだなんて……。この事がもし、お嬢様もとい小夜様の耳に入

つてしまつたら……。

『お兄ちゃんなんて……お兄ちゃんなんてっ、エロティックピクロ
ス!!』ばちこーん

「ぶふっ」

不覚。

いけません、ついご主人様の面白不幸を思い浮かべてしまいました。
碧のばかばかばかー。

とにかくそんなしょうもないことを考えている場合ではなく、今は
目の前のマツパ幼女をどうするかです。

このまま、ここに放置しておくのはあらぬ誤解……というより、ご
主人様の輝かしい経歴に一生の傷をつける結果を招いてしまうかも
しれません。それは例えご主人様が間違いを犯したとしても、真性
メイドシスターの私がこの汚れきった手でもみ消さなければならな
いのです……！決して、家政婦に見られてはいけないのです……！

だだだだ〜ん　だだだだ〜ん

あっ、火サス。

「兎にも角にも、どこにこの幼女を隠しましょうか……」

人一人を隠す場所はこの狭くて汚くて臭い豚小屋には見当たりませ
ん。

……土壌に隠す？それでは本当に火サス展開になってしまうではあ
りませんか。

それはいけません。一番良いのは、ご主人様の罪が暴かれず、なお
かつマツパ幼女を安全に収納できるスペース……。

.....。

あつという間に夜。

【side ONIITYAN】

「今日もお勤めご苦労様です」

僕は自分の部屋で、机に向かいそう呟いた。

これはあれです、自分に対する自分への賞賛の言葉というやつです。しかしあれですね……週明けの学校というものは本当に疲れます。今日も今日とて、上履きに画鋏、戸を開くとチヨークの粉爆弾に被災、机にうんの落書き、ちよつと気持ち良いシャーシンツンツン攻撃、ストレッチがいつの間にか電気按摩、昼食が日の丸弁当入れ替わり事件などなど……クラスの皆様のツンデレ攻撃に心も身体もクッタクタです。

「そんな疲れ切った肉体を癒すおススメのゲームはこちら」

『お姉ちゃんと妹のすゆことぜんぶ。』

タイトルどおりのあれな……つまりはユリユリにしちゃーうゾ的なピー禁ゲームです（ピー禁とは大人の事情で成り立っている……）。

この間、小夜とAKIBAに行った時に偶然見つけた一品です。お金は諭吉さんが二枚ほど消えていくという結構な痛手で入手したレア物ですが……今日はこれでまた一歩、お兄ちゃんは大人の階段に上ろうかと思っています。

「しかし、容量が10GのCD-ROMとは……なかなかカオスなゲームですね」

そして僕はノーパソにゲームディスクをセッティングし、インストールを開始しました。

(三時間経過)

「……まさか。いちやいちや百合ゲーと思っていたのにNTRなゲームだったとは……」

正直お兄ちゃん、がつくりです。

しかもピー禁ゲームの恐ろしいところは、途中まではいちやいちやゲームだったのです……。

それで、あのですね……。もうそれはもう傍から見ても、恋人同士の感じ……。ニコニコした人たちの言葉でいうと『お前らもう結婚しちゃえよWWW』『砂吐きますた』『全世界の俺がないた(T-T)』『近親 姦ですね、分かります』など……。なのに……。

『お姉ちゃん、サヨナラ。もうあんたにはついていけないわ、ぺっ』

……は？

最初はバグだと思いましたよ。いや、もうメーカー訴えられるレベルですよこれいや冗談でしょでしょ冗談と言っておくんまし！で……。進めましたよ、そして画面に出た文字。

『end』デーン

……ディスク叩き割りたい衝動に駆られましたよ。うーん、萎えま
した。

「……はあ、しかしまさかクソゲーだったとは」

……いけません。

もう、忘れましょう……。そして僕はディスプレイから目を離し（
正確には逸らし）、部屋を見回しました。ところで今日はやけに部
屋が片付いていますね。ドアも不自然に拳分の大きさの穴が開いて
いましたし。うーん、何か落ち着かないけどまあいいですか。今日
はもうお兄ちゃんも疲れたです、早く寝ましょう。そして僕はヘッ
ドフォンを外し、床につくためにベッドに向かいました。

『む……ぬ、あ……ふあ……よく寝た、ぞ……』

どこからか幼女の声が。

『ふあ……おおい、こじろ、こじろどこにいる……って、何だこ
こはあ！？く、暗いっ！暗いぞ！暗いぞお！』

……。

『お、おいつつ！何だっここは！？だ、誰かいないのか！？おお
い小次郎！！く、暗い！暗い！そっそれに……狭い！暗くて狭くて
怖いよお！！』

……。

『た、たしゆけて……。ほんとに、ほんとにここは暗くて狭くて怖いんだよう……。誰か、誰かあ……。ひっく』

……………これはどう見ても押入れの中から聞こえてきますね。

僕は内心ドキドキが半分、ムラムラが半分の気持ちでそつと部屋と押入れを隔てる戸をゆっくり開きました。

「たしゆ……………え？」

「え？」

押入れの中から全裸の幼女が出てきました。

「な、な、なな……………！」

「お、おふう……………」

「なっ何だ貴様は！！なっ何で貴様は下半身マツパなんだ！！」

「だ、ダツ　ワ　フ……………ですか？」

「だっ誰がダ　チ　イフだばかあ！！みつ見せるなそんな汚いブツ

！！な、なにおつきくしてんだ！！さつさと隠せえ！！」

「す、既に中古^{びうち}……………ですか？」

「び、びつちとはなんだ……………よく分からんが、早くブツを隠さない
と噛み切るぞこのばかあ！！」

噛み切られるのはすごく怖いので、僕はズボンをもう一度を履き直しました。

し、しかし……………女の子が全裸、というのも目のやり場にすごく困るので服をあげよう。

「なっ何でスク水なんだあ！もつとまともな服を渡せばかあ！」
「い、いや……ちょうど妹のお古があつたからね。それがいいかなと……」

目の前にいる女の子は涙目で僕に抗議してくる。

う、うーん……しかしまさかぴつたりなサイズだとは。確か、小夜が小二くらいの頃に使用していたスク水ですよ？

「妹……？何で貴様が妹の水着を所有しているのだ……」

「まあいいじゃないですか。君は幼女ですし、ぴつたしかんかなサイズです」

「だっ誰が幼女だばかあ！！私は今年で齡二百歳の立派な吸血鬼だぞう！！……って、お前何かどこで見たことあるような顔だな……おかしいな、こんなブサイクな顔一度見たら忘れないのに……」
「……………」

言葉の暴力って……こんなに人を傷付ける刃となるのですね、ぐっすん。

「しかし……ふふ、人間。貴様は吸血鬼の私に出会ったのが運の尽き、だなっ！さあ、さっそく貴様の血をこきゅこきゅ飲ませろお！私の眷属もとい下僕にしてやろう！！又ハハハッ！！さてっ、んちゅっとな」

そう言う女の子は僕の裏ス……じゃなくて首筋にキスをしてきた。は、破廉恥な……！なんて、なんて破廉恥な子なのかしら！！なんて破廉恥な子なのかしら！！

あ、ああ……そうそう、首筋に甘噛み、あま……噛み。

「チューチュー、チューチュー」

「んぎいいいい！！！！もおおお！！！！ぢいいいい！！！！」

「んっ、んく！？ぎぎゃっ！なっなんだこいつ！？」

あ、ああ……甘、噛み……なんて、何て甘美な響きなんだろう……。

僕は彼女の葉の感触のあまりの気持ちよさに思わずエレクトしてしまいました……ああ、なんてはしたないはしたない。

「ふっふふ……しかし、これで貴様も私の眷属弐号になったぞ。さあさっそく……」

「御嬢さん！！！！名前は！？」

「はうっ！？いついきなりなんなのだ貴様は！？め、メル様だ」

「メルちゃん！よく僕の話聞いてほしいんだ！！」

「う、うん……」

僕は両手で彼女の肩を強く掴んだ。彼女は目を丸くして、僕を見つめている。

ふっふふ……見つけた、ボクの、僕の……。

「僕のっ、いや……お兄ちゃんのっ、妹にっ、なってっ、下さいっ！！！！」

「いついやだっ！！お前みたいな変態でブサイクな男の妹になんか……！って、お兄ちゃんの妹……あっ、あー！！お、思い出したぞ！お、お前……！！あのファゲおやぢが言っていた対象者の……！！」

「だっだめですう。メルたんは永遠に僕の妹ちゃんなのですう！！！！ぺろんぺろん！！」

「いいいやだいやだいやだあ！！く、くそう！！小次郎ー！！あの野郎、私を騙しやがったなあチクショー！！！！」

ボクにまたもや妹が（半強制的に）出来ました。

お兄ちゃんと吸血鬼妹（後編）（後書き）

メル（200）

第五の妹。赤髪ロング。出来損ない吸血鬼。

属性：吸血鬼

お兄ちゃんと二次元妹（前編）

「どきどき」

「そわそわ、なのです」

「もふもふ」

「ふわふわ、なのです」

……。

「……なあなあ、さよちー。どうして、さっきからあの男と比奈はなんも映ってないテレビの前でそわそわしているのだ？もふもふ……ところでこのどりあんうまいな」

「ん……まあ、十九時になったら分かるよ。ところでさっきから気になっているんだけど、どうしてメルメルは私のお古のスク水姿なの？もしかしてそういうケがあるの……？」

「ぐっ……こ、これは……あ、あれだ……きゅ、吸血鬼としての私の正装だ！ふふんっ、どうだあまいったか！！」

「どうって……えっと、碧さん？」

「はい、メル様は容姿淫乱で頭の弱いとても眼にも入れられないほど可哀想で、でもそれでいて馬鹿な子ほど可愛いと申しますか……とにかくそんな一家に一台なくてはならない疫病神マスコットみたいな雌豚です」

「ふっ、ふふんっ！そうだった分かれば良いのだ！分かれば！わか……

……ふあ、ふあつくしゅん！」

僕と比奈ちゃんが未だブラウン管仕様の我が家のレトロテレビの前でソワソワしながら、今か今かと時間を気にして待っていると料理をしている小夜とコタツでぬくぬくしているメルちゃんと浴槽を洗っていたのか腕まくり姿の碧ちゃんの三人が台所で談笑をしている

ではありませんか。僕もシスターズといちゃいちゃしたいのですが、何分今は先行しなければならぬ事情が……。

「お、お兄ちゃん！コンマキツカリ、十九時になったのです！！は、早くっ、早くテレビをつけるのです！！！」

「フォー……！！お兄ちゃんのスイッチオンんん！！」ポチツ

僕は焦る比奈ちゃんに催され、素早く手元にあつたりリモコンを操作しテレビの電源を入れました。

すると、テレビの画面に映し出されたのはお八ゲのおぢ様達がタコのよおな真っ赤な顔して、テレビ的に禁句な言葉で互いを罵り合っている姿が映し出されました。何やらおぢ様達は政治的な討論をしていらっしやるようですね。

「ち、ちがうですお兄ちゃん！こんなとうに精も根も枯れ果てたおっさん達が自己快感のために罵り合うドMなハアハア番組は求めていないのです！！はやくっ、はやく良い子の6ちゃんねるに切り替えるのです！！！」

「うっ、しまった！！くっ……リモコンに！あっ、手が……手が汗で滑って、に、にぎれな……！くそっ、我の性なる手中にリモートコントローラをおお！キーーーー！！」つるっつるっ

「な、なに……？一体今から何が始まるのだっ！？」

「しっ、メルメル黙ってて。見てたら分かるよ」

一瞬の動作の遅れが命取りになる！それは戦場に限らず、平和なNIPPONでも言えること！

僕は掌で掻いた汗を服で拭い、再び震える手でリモコンを握りつぶすかのような握力で掴み、すぐさま良い子の6ちゃんねるに切り替えました。ふ、ふう……！お兄ちゃんは無事、任務を遂行しました……！万歳……！万歳……！お兄ちゃん、あっぱれ……！

『魔法処女まじかる プリン』

「おう、おうおうお……………」

「あう、あうあうあ……………」

6ちゃんねるに切り替えると、ピンクとハートできゅあきゅあでプリップリンツな感じのかあいらしいアニメのタイトルロゴがアップで映し出されました。僕と比奈さんはそれを見て、あまりのタイミングの良さに感慨を覚え、両の瞳から涙が出ました……。ああ、プリン……………あたしだけのプリンちゃん……………。

「何なのだ……………あれ？（汗）」

「まあ、その……………何ていうか、ね。タイトルだけでも子供的にアウトだよ、あれ」

「そうでございますか……………なら、『魔法ビッチまじかる プリン』というタイトルを碧は提案させていただきますが、いかがでしょうか小夜様？」

「いや、私に提案されても……………。ていうか、もっと酷くなったような気が……………」

何だかんだ文句を言いつつもテレビに釘付けになるツンデレシスターズにお兄ちゃん何だか甘くて酸っぱい性少年のような気分になりました。んもう！あの子達ったら、見たければ素直に言えばいいのに！そしたら、お兄ちゃんの膝の上に乗せて見させてあげるのに！

『プリップリッププリップリッププリップリップ』

「プリップリッププリップリッププリップリップ」

『レロツレロツレロツレロツレロツレロツレロツ』

「レロツレロツレロツレロツレロツレロツレロツ」

『ペロツペロツペロツペロツペロツペロツ』

「ペロツペロツペロツペロツペロツペロツペロツ」

『ネロツネロツネロツネロツネロツネロツネロツ』

「ネロツネロツネロツネロツネロツネロツネロツ」

そしてタイトルロゴの後は、お決まりの魔法処女まじかる プリンのテーマソングが始まります。

これがまた、神ソングでして……とにかく一度聞けば、思わず口ずさみたくなるような、思わず他人同士でにやんにやんしたくなるような……甘くてねっとりしていて、君子危つく近寄らず的な、そんな思いを良い子の子供達に与えてくれる元気な歌なのです。もちのロン、この歌が流れだしたらふぁん的なおったきーは当然の如く歌いだしますし、僕と比奈ちゃんも元気な声で陽気に歌います。

「何か段々と頭が痛くなってきたのだ……うう、何だこれは……私はもしかして地球外生命体から謎のスタンド攻撃を受けているのかえ……？」

「いわゆる電波ゆんゆんそんぐ、というやつでしょうか……確かに思わず口ずさみたく、ネロネロペロペロレロレロ……」

「碧さん、口ずさまなくていいから……ちなみに、あれがあと十回くらい続くからね」

「なっなに！く、苦痛だ……地獄でしかない。わ、私の魂は一体何処に行ってしまうのだろう……？」

ふふふふふ。

今はまだ君達シスターズはこの曲の味を覚えられる年齢には達していないからね。

そのうちそのメルちゃんが言う苦痛でさえ、快感に変わりそのうち

体が勝手にこの曲を求めてしまうようになりますから……ある意味、タバコやお酒と似たような依存性があるかもしれないですね。ふふ、ふふふふ……………。

「お兄ちゃん！そろそろ、プリンちゃんの本編が始まるのですよ！」

そしてオープニングが終わり、本編に入ります。

僕は比奈ちゃんと同じく、テレビを呪い殺す勢いでジッと凝視します。

『あばばば！私はムツツリケセランパセラン！私のトロピカルな地肌の餌食になりたいお子様はいらっしゃい』カサカサ、カサカサ…………

（きゃー、いやぁー、うきゃー）

何故か海の家の前にもビーチクの一つや二つ出しそうな雰囲気の水着で仮面姿のおば様が、ブリッジをしながら砂場にいる幼女達をゴキブリのような速さで追いかけまわすという何ともシユールなシーンから今回のまじかる プリンは始まった。余談なのだが、二十分放送で中間のCMが入るまでの最初の十分間はプリンとの宿敵、ケセランパセラン（またの名を怪人）の登場及び仮面ラダーでいうところの人間を襲うシーンで占められている。残りの後半は僕らの主人公、魔法処女まじかる プリンが華麗に、それでいてエロティックに登場し、ケセランパセランをドつき回すというお決まりのパターンとなっている。

『若い子の肌が欲しいい！あたしあ、若い子の肌が欲しいんだよお
おお』カサカサ、カサカサ……

『いやああああ、庄司さん助けてええええ！！！！』

『加奈子おお！！！逃げろおおおお加奈子おおおお！！！！』

もつとも単に前半のシーンが全部ケセランパセランの襲撃だけではなくドラマティックな展開もちゃあんと用意されている。例えば、このようなシーンで一人逃げ遅れた庶民である加奈子がケセランパセランに襲われそうになる。そこには、助けてくれる人もいない、周囲に人がいても見て見ぬふりで我が身のことを第一に優先して、逃げていく者が大半を占めるだろう。それは決して、夢も夢物語ではなく、リアルな我々社会を揶揄するような製作者サイドの意図が感じ取れるかもしれない。

『いやついやついやああああ……！！庄司っ、庄司さ……あ……』
『かああああああああああこおおおお！！！！！！！！』

男の声は既に彼女には届かず、それでも男は距離を取りながら叫び続ける。

矛盾、そこには矛盾が生じる。助けたい、助けたいのその一心なのだが、実際に行動に移せない……。これが矛盾、すなわち男は偽善者なのだ。表面上は善で取り繕っていても結局のところは、我が身を優先する……。しかし、誰も彼を責めるものはいない。何故なら、それはその男に限らず誰しもが心の奥底で眠っているかもしれない心情だからだ。ただ残るのは、喪失感と後悔。荒んだ心は社会をダメにする、しかしそんな社会を明るく陽気に変えていこう！という名のコンセプトで登場したのが……。

『ああ……かなっ、かなあ……こお……つつつつつつ』

『お兄ちゃん……大丈夫、あのお姉さんは必ず私が救って見せるから!』

『へぐつ、へぐ……えっ』

砂場で蹲る男の肩を叩き堂々と登場したのが、我らがプリン!!

人間名でいうと、プリン・カスタード……一見、幼女にしか見えな
い容姿なのだがたちまちプリンの力を借りて変身すれば魔法処女に
大変身つ、ケセラランパセラランなんていとも簡単にやつつけちゃうゾ
ッッッ　な展開になることテンプレである。

『待ってて、今すぐ着替え……あ、あれね?』

『ぶ、プリン……?ど、どうしたんだっプリン!?!』

しかし現実は厳しく、アニメの世界でも容赦しない。

プリン・カスタードは確かにプリンの力を借りれば一時的にムテキ
ングな感じになるのだが……。

『お、お兄ちゃん……ご、ゴメンネ。ぶ、プリン……装備一式お家
に忘れてきちゃった!テヘッ』

『ぎゃふん!!』ステーン

当のプリン・カスタードはお転婆でおっちょこちょいな幼女なので
した!!

ピンチだプリンちゃん!?!どうするプリンちゃん!?!戦えプリンち
ゃん!!後半へ続く。

「「痛つ……………」」

「む。小夜にメルちゃん、どうしたのですか？どこか身体を痛めたのですか？どれ、お兄ちゃんが診てあげますから、脱ぎなさ…ああんっ？」ガスト

コマーシャルが入ったところでテレビを見ていた小夜とメルちゃんが顔を歪めて痛いとおっしゃったので心配して近づいたところ、小夜の繰り出した蹴りが僕の下腹部を的確に命中しました。く、くうゝゝ…………これは、い…………いです、うふふふ、ふふふ…………。

「これは…………予想以上に…………。」

メイドの碧ちゃんも何か言いたげな顔をしています、目を閉じそれ以上何も言いません。

予想以上に…………に続く言葉はなんなのでしょう？

「お、お兄ちゃんっ！！もうすぐ、プリンの続きが始まるのですよ！！」

そして、小夜やメルちゃん、碧ちゃんの態度を不思議に思いながらも比奈ちゃんに催され、僕は再びテレビの画面に目を向けました。

お兄ちゃんと二次元妹（後編）

『あばばばばつ！魔法処女になれぬプリンなぞ、シヨンベン臭
いただのビッチ！お前はそこで鼻糞をほじほしながら、黙ってあ
たいの幼女への地肌ぺとぺと攻撃を見物しているのねおほほほ
ほ』カサカサ……カサ

『う、うう……』

コマーシャルという名の一分間のインターバルを終え、テレビに映
し出されたのは水着姿のプリンとブリッジしているケセランパセラ
ンが向かい合っている光景であった。しかしお茶目さんなプリンち
ゃんはお家に装備一式を忘れてしまったので、変身できずその場で
たじたじ。ちなみにこういったお茶目なプリンちゃんは随所でよく
見られる場面であるので、おったきー的な人から見ればモエモエ
とか発狂する場面……まあ、そんな感じである。

『あばばばばつ、つるぺた幼女のもっちり地肌があたいを若々
しい肢体へと変えていくうううう……ぺるぺるぺるぺるぺる
るん！』

『い、いゃん……さ、さわらな……いああああ、き、きもちわる
いいいい……！わ、脇腹を舐めないでええええ……！』（幼女、
と見せかけて実は男の娘な子）

プリンが手を出せないのをいいことに、ケセランパセランは容赦な
く一般人に牙を向ける。

今回のケセランパセラン（名は熟女キラー。以後、この名で記述す
る）の襲撃は『触る』と『舐める』の二つ。

『触る』は砂まみれ、何かの油まみれな手で身体全体（主に上半身）

をベッタベッタ触られまくる。不快感この上ないことは言うまでもないだろう。

『舐める』はもはや語るも嫌な攻撃で、そのあまりのおぞましい光景はソフ倫（正式名称はコンピュータソフトウエ、げぶんげぶん）やびいていーえーのおば様方に強く反対されるほどの問題シーンである。英語表記にしないのは語り手がおば様方に寝込みを襲撃をされる恐れがある故の判断であって、悪しからず。

『う、ううゝゝ！ム力つくム力つくゝゝ！！只の熟女のくせにチョーシにのつてえ……プリンむかつくんだからあゝゝ！お兄ちゃんっ！あいつ殺^やっちゃって！！』

『えっ……ええ！？お、俺が！？あいつを犯^やっちゃうの！？』

プライドをズタズタにされたプリンちゃんが、一般人に八つ当たりのように熟女キラーへの攻撃を支持することも、もはやお決まりのシーンでオタクばんざいな感じである（；；、）　こんな感じである）。

『ウポー、プリンー！！お家から装備一式を持ってきたウポー！！』
『あつー！あたしの装備！』

しかし、このままハイソーですかと番組終了のお知らせとなる程、アニメスタッフも鬼畜ではない。プリンがピンチの際に駆けつけるお助けマスコットキャラ、ウップルの存在を忘れてはいけない。ウップルはすべての命を生み出す石「なんたらストーン」を守る使命を帯びた「選ばれし童貞」で、アップルをストーカーする形で光の園から虹の園……えっ、どこかで見たことあるキャラですって？それは、あれです。彼は派遣社員ですから。

『ウップルゝ』

『プリン〜』

感動の対面。

彼が、光の園からやって来たストーカーマスコットが相方のプリンのピンチを救ったのです。

『氏にさらせええセクハラマスコットオオオオ！！』

『あびゅっ』 ドスッ

……………。

お助けマスコット、ウツプルをセクハラと勘違いしてドつく場面ももはやこのアニメのお決まりシーンである。従って、彼、ウツプルは二十分放送枠でわずか三十秒しか活躍シーンを与えられていないという色々和不憫なマスコットキャラなのである。

『もぉ〜、プリンのコスプレ……もとい装備をくんかくんかって鼻で味わっていたのね！ほんとウツプルはエッチだよ！変態皇太子！ドスケベ太郎！ゲテモノ！肥溜めに落ちて窒息死すればいいのに！ぷんっ』

『お、おいっそんなマスコットと三文芝居している場合じゃないだろ！？って、おいおい！コスプレとか普通に言っちゃったよこの娘！』

つついっ放送禁止用語がポロツと出ちゃうところもプリンちゃんのお茶目っ気所以である。

『任せてっお兄ちゃん！あんな熟女、プリンがコテンパンにやっつけちゃうんだからっっ！それで！？あいつ、どこにいるの！？』

『あ、あそこ……』

「ああ……この真夏の太陽があたいの白き気高きもっちりもちもち肌をこんがり焼いてくれるのよ……ちゅーちゅー」

プリンが目を離れた隙に、熟女キラーは若い肌を堪能しきって疲れたのか、ビーチパラソルの下で日光浴を堪能していた。ぶっちゃっけ、只の熟女であることはここだけのな・い・ちょ！である。

「あ、あの野郎……ジュースなんか飲んで余裕綽々だぞ……お、お
いっプリンどうするんだ？」

『大丈夫つ、今から着替えて…………お兄ちゃんのセクハラ官僚！』
『ばお！』バキッ

「アツチ向いてて！お兄ちゃんのバカッ！！」

『いちいち……何も殴らなくてもイイだろ……顎の骨が外れるか
と思ったぞ』

言葉だけではなく、すぐに手を出しちゃうのも素直になれないプリンちゃんの魅力の一つである。そして、人間から魔法処女への変身は視聴者が一番期待するであろう思わずボツキツキしそうなあばーんなシーンの一つである。しかし、あくまでもこのアニメはゴールデンでお送りしているため、モロ出しはNGである。そのため、パイオツや割れ目ちゃんは巧妙に隠しているので悪しからず。

『ティンクルチンクルミラクルマジカルプリイイイイイー……
ーン……！ジャステイイイイイー……ン……！……』（プリ
ンの変身シーンの決め台詞）

テカツ

『うおおおおお……これが良い子の魔法処女プリン……！って、普通に着替えただけじゃん』

変身シーンは大げさな演出と台詞で華やかに彩られているが、ぶっちゃけプリンがコスチュームに着替えただけであるのも大人の都合所以である。何の夢も希望も与えない現実的な社会を子供達に教えるアニメとしても魔法処女まじかる プリンは絶賛大好評である。

『イックヨー！てりやああああー！ラ ダーキークー！』
『あべしっ』バキッ

プリンが放ったライーキックは油断していた熟女キラーの土手っ腹に見事直撃し、熟女キラーは数十メートルほど飛ばされた。

『うぐっ、うぐぐぐ……こ、この、不意打ちなんて卑怯……』

『ラダーちよっぷ！』ズビシッ

『いたっ、ちよっ、おまつ』

『ライー凸ピン！』ピーン

『あっ、まつて、たんまつ、ちよっ、ほんとっ』

『イダーびんた！』バシッ

『うえっ、いたっ、ほんとに、いたいのっ』

『ラダー頭突き！！頭突きい！！』ゴンッ、ゴンッ

『びえええ、ごめんなさいごめんないい……もう二度とこんな真似しませんからあ……』

こうして、プリンの攻撃により白旗を上げた熟女キラーは傷付いた身体を引きずって、そのまま白のワゴンで逃走した。かくして、魔法処女プリンは今日も悪を殲滅して、平和なビーチを取り戻したのだっ！しかし、まだまだ悪は世界中で蔓延している……今日も明日もプリンはコスプレイヤーとしてアルバイトを頑張るのだッ！頑張れプリン！不景気に負けるなプリン！正社員の道のりはまだまだ遠いぞっ！！

『ふう……これで、悪は滅びたっ……!』

『（何この安っぽい展開……）』

そして、傍観者の青年である庄司は思った。

色々突っ込みどころは満載だけれど、結局魔法は一回も使ってねえなあ……と。

「ふう……終わった、あたしの……あたしだけのプリンちゃん……」

「ふう、寂しいのです……比奈は来週の放送がとても待ち遠しいのですよ……」

テレビの画面にはこれまたかあいらしいエンディングの曲とムービーが流れ始めた。

僕と比奈ちゃんは番組が終わった余韻に浸って、ぼくつとその場でテレビ画面を何の気なしに見つめていました。……ううむ、今週のプリンちゃんも素晴らしかったですね。後で、録画した今日の放送分を脳内に映像を叩きこむ意味で夜通し、しこしこ手淫しながら鑑賞するのでしょうか。

「うえぶっ……うう、けつたいなアニメ見たせいで何だか胃がキリキリと締め付けられるように痛くなってきたぞ……。さくよくちい……バファ ンないかあ……」

「あるけど……吸血鬼って、バフ リン飲んだね……」

メルちゃんはフラフラとした足取りで台所にいる小夜も元へ近寄っ

ていきます。

ふむう、メルちゃんにはまだこのアニメに対する精神的な抗体は持っていないかったのですね。

メルちゃんには悪いことしましたね……小夜に最初見せたとき、お腹痛いよって訴えられましたからね……。その後、陣痛かい？って聞いたら思いっきり打たれましたが、うふふ、無論気持ち良かったです。

「……ふむふむ、なかなか侮れませんか魔法処女。真性メイドの碧とお手合わせ願いたいところなのですが……とはいえ、フィクションの産物。残念です……ちくしょうこのやろっ、はあ……」

碧ちゃんは肩をがっくりと落とし、ため息をついていました。

ふむん、碧ちゃんもどうやらこのアニメのファンになったようですね。結構、実に嬉しいことこの上ないです。新たな生贄……もとい、仲間をげっちゅうしました。テンテカテーン

「……風呂、上がったぞ小夜。良い湯加減だった」

「あつ、琴音ちゃん。良かった……って、ぎよぎよっ！？こ、琴音ちゃん……そ、その格好は……」

そして、今までお風呂に入っていた琴音ちゃんは僕のいるリビングに入ってきました。

ふむむ、琴音ちゃんは長湯が好きなのですね。というより、入浴自体が好きなのですね。

今度、お兄ちゃんである僕と一緒に入る機会あったら背中流しっこでも……。

「やあ、琴音ちゃん。その格好、ぷりていですねウふふ」にっこり「風呂に上がると、私の巫女服がけったいなコスチュームに置き換

お兄ちゃんとアイドル妹（前編）

「ジタバッタすゝるゝなよゝ」

「……」

某カラオケBOXのとある一室にて、マイクを握り、得意気な顔して陽気な声で歌うメルちゃん。

そして僕と小夜、比奈ちゃん、琴音ちゃん、碧ちゃんの五人は順番を待ちつつ、メルちゃんの美声に酔いしれていました。もうお気づきかと思いますが、僕とシスターズは週末の休日を利用して、駅前のカラオケBOXにやって来たのです。

「（……古い。曲のチョイスがすごぶる古いよメルメル……）」

「（比奈はクソパンマンのテーマソングを歌うのです）」

「（……何だ。じえ、じえーぽつぶ？あ、あにそん？……やばいぞ、全然わからん）」

「（やはり二百年生きていただけあって、メル様の曲のチョイスは懐古厨の雌豚ですね）」

ふむ、シスターズは今か今かと自分の美声を晒したくてウズウズしているようです。

うふふ、お兄ちゃんも楽しみですよ……さて、録音録音。シスターズの美声を録音して今夜はうはうはハッスルするのでしょうか。

「ハア……ハア……又ハハッ、やはりからおけというやつは楽しいな！久しぶりに熱唱してしまったぞ。はあ、喉が渴いた……」

「やあ、メルちゃん。お兄ちゃんは思わず、右手でバナナをピストン運動したくなるほど聞き惚れちゃいましたよ。あっ、僕の飲みかけでいいならこのジュースいるかい？……関節キスです、ぽ

っ／＼／

「いるかつ、氏ね！」

一曲を歌い終えたメルちゃんが気持ちよさそうなアへ顔で喉の渴きを訴えたので僕の飲みかけのジュースを手渡そうとしましたが、思いつきり拒絶されました。……お兄ちゃん、ぐっすん。

この切ない思いを乗せて、今度はお兄ちゃんの十八番のアニソンを披露するとうしましょう。台して、少子高齢化のこの社会に訴えかけるセンサーシヨナルな前衛的ソング。お兄ちゃんの美声に聞き惚れて、濡らすんじゃないゾツ。

僕が液晶の端末に入力したアニソンのイントロがこの狭きカラオケルームに軽快に流れます。

そして、僕はマイクを構えて堂々とした面持で歌う準備をします。

うふふ、見て下さい、妹たちが醸し出す何処かしらったとした空気が僕は超えるべきハードルが高ければ高いほど、萌えちゃう……燃えちゃうタイプなのです。

「こ・づ・く・り、しまっしょっ！ー！ーッー

……。

お、おろろ！？な、何故っ……曲の出だしなのに止まるのですか！？もしかして、カラオケの機械の故障なのですか！タイミング悪いですなっ！！

……。

いや、これはあれですか。

もしかして、アカペラで歌え……と？

いやんっ、ばかんっ、そんなの……あたい恥ずかしい！そんなっ……

…そんな、いいでしょう。

皆々様が僕に羞恥プレイをお望みならば、その挑戦真っ向から受けて立ちましょう……。

そして、僕は再び気を取り直して握り潰すかのような勢いでマイクを握ります。

「お兄ちゃん、今度は私の番だからマイクちょうだい」

小夜が僕が持っていたマイクをするつと、いとも簡単に奪いました。

「おお、今度はさよちーが歌うのか！よしよし、私がみっちり採点してやろう！ぬふふ……」（得意気なメルちゃん）

「小夜ちゃんは何を歌うのですか？」（興味津々な比奈ちゃん）

「えつと、その……恥ずかしいけどね。メジャーなところでE.L.Tのもつちーの歌……」（初期の小悪魔的な性格はどこへいったのやら、な恥ずかしげに俯く小夜さん）

「もつちー？そ、それは美味しいのか小夜……」（そもそも歌自体がよくわからない一人浮きまくっている大和撫子な琴音ちゃん）

……うた、アカペラ……僕の、アカペラ……。

うふふ……皆さん、聞いてください……僕の……アカ、ペラ……。

トン……。

後ろから誰かに肩を叩かれ、振り向くとそこには目を瞑り、左右に首を振るメイドの碧ちゃんがいた。

「ご主人様、お気を落とさず。……まあ、こんなこともあるさ」

.....
お兄ちゃん、ちょっと本格的に木陰で泣いてもよろしいでしょうか？

そして、数時間経過。

シスターズと休日を楽しんで（正確には僕は眺めていただけなのですが、うふふふふ……）、そろそろお開きムードが漂い始めた頃に突如として、思いがけないほどの女の子が現れた。

「じゃーまねっ！ まったせったねー！！……って、お、おろろ？」

今までジューズを持ってくるカラオケの店員さんしか開けなかったドア。

そのドアが突如として、見ず知らずの女の子の元気な掛け声とともに開かれた。

白のキャスケットを深めに被り、白のセーターと緑と黒のチェック模様の短めのスカートと現役女子高校生を思わせるその格好。

そして、そんな清純そうな女の子には不釣り合いな不自然なサングラス。

「……あ、あつれ〜？ も、もしかして、ボク……部屋、間違えちゃったかなー……？ なーんて、あはっ、あははははは………」

.....。
決定的なのは目の前の女の子が放つこの透き通るような女性らしからぬボーイッシュな美声。

そして、僕はこの声を少なくともここにいる誰よりも知っているし、夜中何度もその声を聞きながらおなにいに明け暮れていたことが……

……うふっ、うふふふ……そして、僕はツイている。新世界を構築しようとしたキラ的な人と同じくらいいつているかもしれないね。うふっ、うふふふ。

「……あはっ、あははは……楽しいところ、お邪魔しました……なーんて……」

そして、女の子はそのまま何事もなかったかのようにドアを閉めようとしてしまった。

「ま、待ちなさい!!」がしっ
「ひっ!?!」ビクッ

しかし、そうは問屋が卸しません。

おし おき などではなく、確認しなくてはいけません。

僕は、すかさず女の子の両肩を逃がさぬよう思いつきり掴みます。

「ハアハア……君は、ハアハア……もしかして、いやもしかなくても、ハアハア!」

「な、何……?何なのこの人……こ、怖い」

女の子は小動物のようにふるふる震えながら、僕を見つめているようです。

こ、こ、この、僕が、ま、ままままさが……ここここ、こんな所で……君とハアハア!

うふふふふ……う、うれしいっ……!うれしいですうううへへへへ……!!

妹様は目の前の女の子に謝罪と容赦ない僕への悪口をおっしゃっています。

床にへたへたとへたり込んでいる女の子は僅かに苦笑い。ふふっ、いけない。あまりの衝撃にちよつとはっちやける僕のお茶目さんの性格はどうやらまだ治っていないようです。いけないいけない……パパに女の子には優しくしなさいと言われてるのに、気をつけないといけませんね、てへっ

「……プリン、プリンの声です」

「あ……う」

ほう、比奈ちゃんも僕と同じくどうやら気付いたようですね。

「プ、プリン……？何それ美味しいの？」

「誤魔化しても無駄なのです、中の人」

「わ、ワタシハ、ウチュウジンデアル。プリンナドトイウネームデハナイデス」

「この女も何なのだ……」

比奈ちゃんに問い詰められ、女の子はたじたじもじもじ。

ふふっ、今更そんな声を変えても、プロの僕には通用しないのですよ。

そして、ようやく回復した僕は立ち上がって、その女の子に向かって言います。

「誤魔化しても無駄ですよ……君は『魔法処女まじかる プリン』の主人公っ、プリン・カスタードを演じる歌って踊れるアイドル！桃井林檎ちゃんですね！？」

「アイドルじゃないよっ、ボクはアイドル……あっ」

気付いた時には既に遅し。

僕がカマかけた女の子はいとも簡単に自分の身元を証明してくれたようです。

「はあゝゝ……まいったなあ、こんな所で一般ピーポーに見つかったらうなんて」

勘弁したのか、目の前の女の子……いや、林檎ちゃんは白のキャスケットとサングラスをとり、僕とシスターズにその顔を露わにします。

金髪の肩口までかかるくらいのショートヘアー。

そして、白き肌に顔の一つ一つのパーツがとても幼さが残っている美少女。

間違いない、この子はあの桃井林檎……僕が愛してやまないアイドルですね。

「だからっ、ボクはアイドルじゃなくて、アイドルだっちゅーの……」

ふふっ、僕の心理を読むスキルまで身につけているとは。さすが、ザワシの嫁。

「わあ、すごいです、すごいです。お兄ちゃん、見て下さい。この子、おっぱいがちっちゃいのです」

「なっ、なな……」

比奈ちゃんは林檎ちゃんの顔を下から覗き込むような形で見つめています。

ふむ、何ていうことを言うんだい比奈ちゃん、グッジョブです。

「へ、変質者ッ」

林檎ちゃんは両手で胸元を隠し、真つ赤な顔して僕にそう言います。何故か僕が罵られるという一連のパターン。最高です。

「なんだ……この女はあの気持ちの悪いアニメの主人公の声をやってるやつか」

「……なんですって。ちょっと、そのひんぬーの君、もう一度言ってみてよ」

メルちゃんの小さな呟きが聞こえたのか、林檎ちゃんはメルちゃんをギロツと恐ろしい形相で睨んでいます。

「ひ、ひんぬーだとう……！い、いいだろうっつ！もう一度言ってみてやる！！地雷アニメのクソ声優！」

「き、きいー！だ、誰が地雷アニメのクソ声優ですってえ！！あのねっ、ボク達声優は命かけてんのっ！あんたみたいな生意気なクソガキにそんなこと言われる筋合いはないの！べえーだっ！」

「く、クソガキだとう！？このビッチ！私は齡二百年のこの世を生きる吸血鬼だぞお！敬え、バカあ！！」

「はあ！？齡二百年！？吸血鬼！？何そのアニメみたいな超設定！？あんた、にわか腐女子でしょ！？バーロー！」

そして、火が付いたのかメルちゃんと林檎ちゃんは互いに罵り合っ

ています。

こ、これは……もしや修羅BARというやつなのでしょ……。
そんな、僕を奪い合う争いだなんて……やめて下さい、二人とも。
僕は二人とも同じように、平等に愛しますから……もちろん、さん
ぴーもやりますから。

「それはない」

それはない、入りましたー。

「ふぬぬぬぬっ……」

「ふ、二人とも……落ち着いて。そうだ、折角なんだし、林檎さん
も私達と一緒に親睦を深める意味でカラオケしない？」

睨み合うメルちゃんと林檎ちゃんの仲介に入ったのは我が妹、小夜。
ふむ……いいかもしれないね。林檎ちゃんは声優だけでなく、歌手
としても業界ではS評価ですし……もっとお近づきになれるチャン
スだね。

「カラオケ……か。いいだろう、このビッチに私の歌唱力を見せつ
けて、泣かしてやるのも一興だなくつく……」

「言うねえキミ……。ボクは声優だけでなく業界では歌姫とまで呼
ばれるほどの女の子だよ。数分後に泣いているのは果たしてどつち
なのかわくつく……」

「いや、だから……親睦を深める意味で」

こうして、吸血鬼メルちゃん対アイドル林檎ちゃんのど自慢大会
が始まった。

お兄ちゃんとアイドル妹（後編）

「くつくつく……吸血鬼の私の悪魔的な美声に聞き惚れて、下のお口をびちゃびちゃに濡らすじゃないぞこのビッチ」

「ほんと、口の悪いお下品なガキだよね君……いいよ、アイドルの力つてものをとくとその身体に一生分の精神的傷痕を刻み込んであげるよ……くつくつく」

カラオケBOXという名の閉鎖空間において。

メルちゃんと林檎ちゃんはマイクを握り、今にも呪殺しそうな感じで睨み合っています。

そして、傍には小夜がオロオロと両者を交互に見やり、仲介に入ろうと試みていますが、二人の殺気という殺気に充てられたのか何処か一歩踏み出せずにいます。

ふむ……ここはお兄ちゃんである僕が器量というものを妹達に見せつけなくてはいけませんね。

さすれば、好き好き大好きお兄ちゃんぶっちゅう的なイベントC Gがげっちゅうできちゃうビッグチャンス到来ですからね。

『すごいっ、お兄ちゃん大好き！！キスして！！抱いて！！そして近親的な相姦して！！』

『すごいです。ソンケーしちゃうのです。某チューベットのようになちゅーちゅーしてほしいのです。そして、お兄ちゃんの肉棒にもちゅーちゅーするのです、レロレロ……』

『くっ……そうか、すまん……そのっ、素直になれない私が恥ずかしい……そ、その何だ……お前の肉棒が欲しい……も、もちろん私は巫女服を着たままのプレイだ……／＼／』

『真性メイドの私の身体はご主人様、全て貴方のものです……嗅ぐ

なり触るなり舐めるなり煮くなり焼くなり食べないして下さいませ……キヤツ、いつちやった！碧、イツチャツタ／＼／

『ふ、ふんっ……！好きにするのだ！どうせ私なぞ、とうに枯れ果てた二百歳のババアだ……貴様のような下衆に何をされようと……あつ、やめろっ！そんなところ舐めるなあ……／＼／』

ふおおお……お兄ちゃんの脳内麻薬は既に循環系を経由して身体中に行き渡っているようです。

そうです……自ら動かなければ、何も得られない。そうなのですよ、それは恋愛でも言えることで、アグレッシヴにアタックナンバーワンしなければ一生、独身貴族……自宅警備員……諸行無常の響きアリ……古き良きエロゲー主人公もといナンパマンを見習って僕も自らを律せねばなりません……。

「炉理根万歳、所他根万歳、男根一発、性者生粹ノ断リヲアラワラス……」ブツブツ……

「な、何かこの人小声で唱えているんですケド……」

「おいっ、そのビッチ大蔵！そんな変態は放っておいて、早く私とかからおけ勝負をするのだっ、くっくく……それとも何だ？早くも私と勝負するのが怖くなって下のお口がユルユルになったかこのビッチビチ！」

「さっきからビッチビッチって不名誉なワードを連呼しないでよもおー！ボクにはちゃんと、林檎って名前があるんだからっこのひんぬーのバーゲンセール！」

「ひっ、ひんぬーの……バーゲンセールだとお！？このビッチビチイ！表へ出るおーわ、私が気にしていることをよくもおおおー！」

「なによ、やる気！？」

「ぐぬぬぬぬ……」

おっとっと、僕が行を唱えている間にますますメルちゃんと林檎ち

やんの勝負はヒートアップしているではありませんか。子供の様に頼つたや髪を引っ張っぱり合ったり、揉みくちゃになっていやんばかなレズレズ展開に……残念ながら僕の脳内願望ですが。

ふむ、しかし林檎ちゃんはこのようになちよつと子供っぽいところもあつたのですね。

ライブのステージから眺める華奢な彼女は華やかで、美しく、そしてその中に可愛さを含んだそれもう僕のような変態紳士にはもったいないくらい遠い存在だったのに。彼女はまだ高校一年生の女の子…… 本当は色々ながらみから逃れて、友達と思いつき遊びたい年頃でしょうに。他人の僕には計り知れませんが、彼女の新たな一面を見ているような気がします。

フフフ、柄にもなく語ってしまいました。

いけないいけない…… 今は妹達の喧嘩をお兄ちゃんである僕が止めなくては。

繊細な生き物の女の子の顔に傷をついたらメーッなのです。度が過ぎたらメーッなのです。

そして、僕は今まさに可愛らしく取っ組み合っているメルちゃんと林檎ちゃんの肩に手を乗せ、言います。

「ランボーはいけません…… さあ、お兄ちゃん的美声を聞いて落ち着いてください。皆様と一緒に、いちにつきさんはいつ！くれえゝなずむゝまちのおゝひかゝりのかげのおゝなか」

「うるさいだまれっ！」「」

「あ、はい、ごめんなさい」

お兄ちゃん、怒られちゃいました。シヨボーン。

「はあはあふうふう……こ、こんな争いは不毛だな。そろそろからおけ勝負といこうか」

「ぜえぜえひいひい……そ、そうだね、や、やっぱりアイドルは喉が自慢だからね……」

数十分後。

長らく続いた女子達の取っ組み合いは両者がこのままでは決着を着かないということでしょうやく終止符を打たれました。

「くくつ、このからおけロボの採点評価は半端なくクソみたいにな……それはもうぶつ壊して燃やしてチリチリにしたいくらいに酷しくて有名だからな……覚悟しろお」

「そ、そんなに厳しいの……？ごくりっ」

メルちゃんはカラオケの機器をゴンゴンと叩き、ふんぞり返って説明しています。メルちゃんの説明を聞いていた林檎ちゃんはみるみる内に真っ青な顔になっています。ふふ、確かにカラオケ機器の採点機能はとてつもなく厳しく、少しの音程外れも見逃さない万能ロボ君ですからね。たとえ、上手く完璧に歌えたとしても望む結果が得られないという経験をのど自慢の皆様もしたことがあるでしょう。特にこのカラオケBOXはソレが顕著なのです。

「そうだな……。実際、やってみないと分からないか。おいっ、貴様！」

「はい、何でしょうメルちゃん？」

メルちゃんは僕に向かって、指を差したので僕はヘイタイさんのこ

とく直立します。

「何でもいい、何か一曲歌ってみろ」

「何でも……ですか？それでは、お兄ちゃん一曲イカせていただきます。タイトルは『お兄ちゃんと妹のぶっかけいちばんなのになん！あつたかいのになんころになん！』それでは、皆様も一緒にどうぞなのになん」

ヴァキ

「真面目にやれ」

「はい」

メルちゃんは真顔で僕の頭をしばきました。

……ふむ、なるほどそういうことですか。つまりは僕に一曲イカせて、採点ロボの恐ろしさを林檎ちゃんに見せつけるためのメルちゃんの一種の精神的攻撃ですねこれは。……しかし、メルちゃん。作戦自体は大変よろしかなのですが、ひとつ……貴方は決定的なキヤストミスを犯しました。

「……では、お兄ちゃんの十八番。曲のタイトルは『お兄ちゃんの濃厚ミルクでミックミックにしてあげにゅーくぱあ』でよろしいでしょうかメルにやん？」

「あゝもお何でもよい。いちいちタイトルを口にするな気持ち悪い」
メルちゃんの唯一のミス……。

それは、僕を採点ロボの人柱にしたことです。
僕の歌唱力はあるのJ A C Oの有線で認定されるほどのものであることを彼女は知らない。そしてその実力を肌で感じ、僕のゴッドヴオイスに酔いしれなさい……。さすれば、色んなところがびっちゃ

びちゃになり、知らず知らずのうちにお兄ちゃんの肉棒を求めるよ
おになるのです……。

僕がこのマイクを握ったが最後……。

このカラオケルームという名の密閉空間は忽ち、汗や肉欲液まみれの
酒池肉林の渦に巻き込まれることを彼女らは知らない……。

「それでは……お兄ちゃん、イかせて頂きます」

ぶっかけミルクッ！ぶっかけミルクッ！（お兄ちゃんは只今、熱
唱中なのです）

『69点』

「はい、ご苦労。はい、みんな拍手」

ぱち……ぱち……ぱち。

メルちゃんは僕が歌い終わると、すぐさまマイクを奪いシスターズ
に拍手を求めています。

そして、疎らに聞こえる拍手の音が僕の評価そのものであることは
言うまでもない。

「（微妙に欠点免れているのが何かムカつくよね）」

「（お兄ちゃんが切なすぎて比奈の口からは何も言えないのですよ）」

「（ふ、ふふ……やばい、な。……誰か私を止めてくれ。今の私は何をしてくすのか分からない）」

小夜、比奈ちゃん、琴音ちゃんの小さな呟きが僕の耳に入ってきてます。

ああ……あたいは、あたいはもお……

「ご主人様、お気を落とさず。……まあ、とりあえず頑張れよ」

拝啓

お父様

お母様

妹様

一冬過ぎ、大分暖かくなり、暮らしやすい穏やかな季節を迎えました。

お元気でしょうか？私は元気モリモリ性欲ちゃんもシコシコ全快でございます。

早速でございますが、捜さないでください。

by ONIITYAN

「又ハハハハッ、どうだあ！見たかつ、採点口ボの理不尽で暴虐的な威力！歌詞はともかく、その彼奴はそこそこ歌えていたのにも

関わらず、だっ！！」

「う、うう……」

メルちゃんはまたもやまな板胸を張り、林檎ちゃんに向かってそう言います。

ふむん、そこそこ歌えていたとな。もう、それだけが今のお兄ちゃんの救いなのですよ……。

そして一方の林檎ちゃんは何故かお腹あたりを両手で押さえて、今にもゲロゲロゲーしそうな苦しそうな表情をしています。……ふむ、僕の点数はともかく結構メルちゃんの作戦は精神的な面で有効打をしているということでしょうか。一応念を押しておきますが、僕の採点はともかく、ですよ？

「さあ、これで採点ロボの恐ろしさを分かったところで勝負だっビツチビチィ！」

「ちよつ、ちよつと待って……」

そして、早く歌いたくて仕方ないのかメルちゃんはマイクを握り、テーブルの上に乗って既にスタンバっています。しかし、お年頃ではないのですがの女の子を下から眺めるのは何とも素晴らしいことでしょうか。ちい、スカートの中身の布きれが見えぬことが残念でござる。

「何だあ！ビツチビチィ！」

「あの……そのっ、おトイレ……行ってもいいかな？」

林檎ちゃんは真っ青な顔して、左手はお腹に、そして気まずそうに右手を上げます。

ふむん、林檎ちゃんの台詞と様子を見て僕は察しました。ずっと、我慢……してたんだね。

おっと、僕のお口からは林檎ちゃんが今何を催しているのか、それ

は言えません。ないちよ！

「と、トイレだとう……貴様っ、もしや採点口ボに怖気付いて、敵前トーパーするつもりだな！？そうはいくかつ、私と貴様が歌い終えるまでここに残ってもらうからなっ！」

メルちゃんはそんな林檎ちゃんの様子に素直に受け止められないのか、その場で地団駄を踏んで、マイク越しにそんなことをおっしゃっています。ふむん、結果的には火に油を注いだようなものですねこれは。

「うるさっ……す、するわけないでしょ！そんなっ……ボクは歌姫なんだよ！君みたいなトーシロー相手に……うっ、うっ、お腹痛い……」

そして、林檎ちゃんもメルちゃんの言い分にカツときたのか、声を荒げそんなことを言っています。しかし力み過ぎたのか、林檎ちゃんはまた両手でお腹を押さえへるへとその場で蹲ってしまいました。

「ふんっ、そんなにシーシーやらうんをしたいのなら、歌いながらでも垂れ流せばいいではないかつ！！さあ、私と勝負しろビッチ！！」

「し、しないよ！！あ、アイドルは……し、シーシー何かしないもんっ！う、う 何かしないもん！！……あっ、あたた……」

林檎ちゃんは真っ赤な顔して、メルちゃんにそう抗議してます。ふむん、ここは何とかしないとイケません。こういう時こそ、お兄ちゃんを十二分に使ってもらえるチャンスなのです。そして僕はおもむろに口を開け、林檎ちゃんの足元に四つん這いで向かいます。

「……………ナニ、してるの？」

「シーシーやらおうん が我慢できないと仰られるのなら……………僕の上のお口が貴方のお便器になりましょう」

「な、何言ってるの！？さ、サイテー！！氏んじゃえ！！」

ドガス

「あぴぽっ！？」

そして容赦ない林檎ちゃんの垂直蹴りが僕の股間ちゃんにクリーンヒットしました。

あ、ああ……………だめえ、あた……………もお嫁にいけない身体になりましたので……………

「うう！いい、今動いたせいでまたお腹が……………」

「だ、大丈夫？本当にトイレ行ってきたら？連れて行ってあげようか？」

私めのリアル妹様は気遣いの言葉を林檎ちゃんにかけています。

うーむ、本当に僕の妹は僕以外に気遣いができる出来過ぎた良い子です。

「何を言ってるさよちー！？そいつはトイレだとか言って、そのまま勝負から逃げるつもりなのだぞ！？」

「メルメル、この中で一番年上なのに大人気ないよー」

「うっ」

「メルちゃんはお子様なのです」

「うぐっ」

「メル、我儘は子供の始まりだぞ」

「うにゃっ」

「メル様は汚らしい雌豚でございます」

「ぴい」

「メルちゃん、僕の肉棒をお舐めなさい」

「シネツッ」

バキッ

「OPPUSU!」

……い、痛い。

流れるに何でもできそうな雰囲気でしたが、人生そう甘くはないですか。

しかし、シスターズの言い分はもったもなものです。そして、雰囲気を察したのかメルちゃんにはあと軽く息を吐き、口を開きます。

「……すまん、熱くなり過ぎた。体調が悪いのに……ほら、手を貸してくれ。トイレだろう？一緒に連れてってやるぞ」

「う、うん……」

そして、メルちゃんが手を林檎ちゃんの前にし、それを林檎ちゃんは取るうとします。

友情が芽生えた瞬間、とてもいいですか……しかし。

「……いい。大丈夫だから、ほんと気にしてないから」

「……え？」

林檎ちゃんはそう言い、ドアに手をかけ個室から出ようとしています。

しかし、そうは問屋が卸しません。僕は皆のお兄ちゃんなのです。頼りたいお年頃のお兄ちゃんなのです。そして僕は林檎ちゃんの

下に駆けつけ、すぐさま手を取ります。

「え？な、なに……？」

「大丈夫じゃないですよ……こういう時こそ、お兄ちゃんに任せなさい」

「お、お兄ちゃん？何言つて……わっ！？」

僕は彼女の背中と裏腿に手をやり軽々と彼女を持ち上げ、抱っこします。

いわゆる世間様々でいうところのお姫様抱っこというやつでしょうね。

「ちよつ、ちよつと！こんな格好恥ずかし……」

「それでは、先生。行つてきます」

「ど、どこに！？きゃっ、や、やめっ……！」

僕は個室のドアノブに手をやりそのまま彼女を抱えて表に出ました。

「……………誘拐？」「……………」

「ここでいいでしょう」

「はあはあ……ちよつと、一体何のつもり……」

林檎ちゃんは僕をキッと睨み、そう言います。

「女子おトイレです。さあ、存分にシャーシャー、プリプリしてき

なさい」

「いつ……だからっ、アイドルと天使はシーシーとか、そのうん……なんてしないのっ！……ていうか、君、女の子に対してデリカシーって言葉がわかんないの！？」

林檎ちゃんは真っ赤な顔して声を荒げています。

ふむん？おかしいな、明らかに林檎ちゃんの様子は大的方を催しているからだと思ったのですが……僕の見間違いなのですか？

「……………」

そして林檎ちゃんは僕のことをまるで気にせぬように、ポツケから何やらポリエチレンの袋に入った青と白のカプセル型のお薬を取り出し、口に一粒放り込み、そのまま飲み込みました。

「……………何、見てるの？」

「いや……………」

「ボクが持つてるこのお薬が何なのか、気になる？」

「……………うん」

……ふむん、何だかへヴィな雰囲気になりましたが、お兄ちゃんである僕はそのお薬が何なのか気になるのです。素直な反応しかできないお兄ちゃんを許してあげてネ！

「教えてあげないよ、お兄ちゃん」

「っ」

……今、林檎ちゃんはプリンの声で僕を……。

「あはっ、ばーか」

そして、彼女は笑顔でそう言い、僕に背を向け去って行きました。
僕は……本当の彼女の顔をまだ掴めていないのかもしれないかもしれません。

「君、ちょっと署までご同行願おうか」
「……え？」

お兄ちゃんとアイドル妹（後編）（後書き）

林檎^{りんご}（16）

第六の妹。プリンの中の人。ボクッ娘。

属性：アイドル声優

【幕間】『妹増殖計画会議？』

社会から隔絶された地下空間。

そこは何者の罵声も悲鳴も嬌声も何もかもシャットダウンする。

つまりは一步踏み込んだこの地下空間には忍者の国NIPPONの治外法権が存在しないことを意味する。

自由。

それは仕事や勉強に追われた民衆の誰しもが欲する甘美な欲求、しかし逆に言えば保障されない意。つまりは誰からも庇護を受けないのだ。

捨てられた空間、社会から捨て去られた人々。

民衆は彼らのことを皮肉を込めて『奈落の愚者』と呼ぶ。

しかし、奈落の愚者達はそのことを恥と認識していない、むしろ誇ってさえいる。それは己が落ちこぼれであるという認識をはるか遠くの彼方に捨て置いているからだ。己は高等生物、と驕ってさえいる。そして彼らはアリクイのように待っているのだ。何れは民衆がこの地下空間に魅了され、予め敷き詰められたルールに則って型に嵌っていくということを。

『妹増殖計画』

「それでは第七十三回『妹増殖会議』を始めます」

暗闇の暗室にて、パワーポイントの光で浮かび上がった少女の地肌は酷く青白く、まるでこの世に存在しない浮世の者を思わせる佇まいでそう呟いた。十二人の愚者たる彼らはその重々しい彼女の様に、顔を強張らせ次の彼女の言葉を待った。あの中でも一番色々と残念な長老でさえ黙っているのだ。相当に深刻な事態に陥っていることは肌で感じ取れよう。

「……今回は、また新たな対象者の性質について我々の調査で明らかとなりました。……と、その前に前回の会議をニヤニヤ動画にアップしましたところ、ニヤニヤ住人から様々なリアクションがありましたので報告します」

「……なんぢや、見せてみよ」

名波と呼ばれた少女は長老の言葉にくくと頭を下げ、カタカタとパソコンのキーボードを機械的に操作する。

すると、スクリーンに映し出されたのはニヤニヤ動画と呼ばれるサイトである。このニヤニヤ動画とは某ニコニコ動画のサイトとは似非的な立ち位置で存在しているが、検索してもグーグル先生には引っ掛からない、いわば国家機密レベルの裏サイトである。では、国家機密であるサイトにニヤニヤ住人はどうやってアクセスしているのか、それは今のところ謎に包まれている。

そうして、スクリーンには前回の会議の動画が再生される。

しばらくすると画面上にはニヤニヤ住人が入力したコメントが流れてくる。

『ちよつwwwなwwwにwwwこwwwれwww』 『wwwwww
www』 『色々とヤバいだろwww主に頭の方がwww』 『コラ

「wwww」 「おいwwww」 「やめろwwww」 「やめてwwww腹痛いwwww」 「仕事しろwwww」 「お前もなwwww」 「長老wwwwどこ
のドラクエだよwwww」 「俺と同業の方がいっぱいいるwwww」
「長wwww老wwww」 「何これ、ネタなの？死ぬの？wwww」 「自重
しろwwww」 「奈落の…なんて？wwww」 「だせえwwww」 「部活
かよwwww」 「シーシー（；、）ハアハア」 「妹攻略wwww」
「……………」 「テラ変態wwww」 「マジ基地wwww」 「見にくいw
ww」 「ヤクルト盛大に吹いたじゃねえかwwwwどうしてくれるw
ww」 「長老で抜いた、死のうorz」 「おいせうおいせうネ申ネ
タ、本当にありがとうございました」 「自演乙」 「これおまいら
のオフ会風景だろwwww」 「再生数……wwww」 「何でちよつと薄
暗いのwwww」 「地下帝国乙wwwwwwww」 「対象者ってなんだよ
wwwwメガネのことか？」 「誰得だよwwww」 「俺得だよwwww」
「公開オナニー集団wwww」

「このように多くのコメントが入力されていました」

「荒れに荒れとるではないか……」

「ドッピン」

長老は神妙な顔して動画を見つめているが、奈落の愚者らは想定範囲内だったのか、特に反応を見せず、中には欠伸をかみしめている者やちよつとフイている者いる。そもそも、長老はネットサーフィンを一度もしたことのない老害で、このような反応が予想できなかったであろう。某ニコニコ動画でこのようなものをうpすると、すぐさまBAN（店仕舞い）されるのは言うまでもない。

「だ、誰ぢや！？今、ワシのことを笑った愚か者は！？で、出てこいっ！！」

「」「」……「」（奈落の愚者ズ）シーン

ちょっと笑われたのが気に入らなかったのか、長老は杖を上げ、激昂して問い詰める。

しかし、奈落の愚者らは一様に皆、静かになり、何事もなかったかのように沈黙を保っている。

「おのれ小童どもが、玄人であるワシを侮辱しおつて……まあよい。名波君、続けとくれ」

「はい、老害。それでは、今回も対象者についての動画をご用意したのでご覧下さい」

何の玄人だよ、と思っけていても問う者は誰一人いなかった。

そして、今回も対象者の日常風景が収められた動画が再生される……。

『はあ……目が、目が……痛いぞあ……もつと優しくしろあ……』

『メル様はアホの子ですね。目を瞑っていないければ、シャンプーが目に入ってシミシミするではありませんか』ゴシゴシ

『だ、誰がアホの子だあ！？ぐあ！メガツ、めがあー！！』

最初にスクリーンに映し出されたのは、一般的な家庭にどこにでもあるような狭きタイル張りの浴場。

その浴場では一人のボンキュッボンツのカチューシャを着けた女性の色々と残念……もとい華奢な白き体軀の長髪の幼女の頭をゴシゴシとシャンプーしている。モチのロン、ご都合主義的に局部は湯気で見えぬよう設定されていることは言うまでもない。

「「「うおおおおお！……！！！！！！」」」

これには長老や奈落の愚者らもボッキッキーである。
獣たちの興奮冷み止めぬ中、動画はなおも続く。

『背中をゴシゴシゴシゴシ』

『お、おいっ……！も、もう少し優しくだなあ……！』

『すゝいっすい、すゝいすいと』

『ひゃっ、ひゃうう！！こ、こらっ！！こそばゆい！！背筋を指先で撫でるなあ！！』ビクッ

『これがええのんか、これがええのんか』

『や、やめっ……！！うひゃううう！！くすぐりたい！！やだっやめろお！！』

怪しげにほほ笑むカチューシャ女性もといメイドは容赦なく指先を幼女もとい吸血鬼の背筋に芋虫のように這わせる。吸血鬼はその背筋に走るこそばゆさに耐えきれないのか、ジタバタと暴れまわりついには床にペッタンと転び落ち、背中の上からメイドにのしかかられる形となる。

「こそばゆいキタ！！キタよ！！これキタ！！」（奈落の愚者E）

「うう、き、気持ちいいゾウ！気持ちいいゾウ！！」（奈落の愚者F）

「優しくしてねっ、お兄ちゃんをとっても優しくしてねっ」（奈落の愚者G）

「メルたん、れろろ」（長老）

思わぬ百合的な展開に奈落の愚者らも絶賛、妄想の晩餐会である。

『……メル様のお肌は白くてすべすべで綺麗でモミ心地があります

ね……二の腕ぷにぷにー」

『あ……お、おいっ、どこを触って……!』

『ふむ、果たしてメル様はどのような嬌声を上げてくれるのだろうか。真性メイドの私は気になるのです』

『……お、おい? き、貴様……何で、その、手がそのまま下へ……や、やめっ!』

メイドの指先は二の腕に終わらず、そのままゆっくり、ゆっくりと女の子のイケナイプレイスへ……。

『失礼しますっ!』 ガラッ

『!?!?』

そして、浴場でメイドの欲情展開になる直前で浴場の扉が一人の男によつて開かれた。

メガネをかけた優男、今回の対象者であるお兄ちゃんである。お兄ちゃんは腰にハンドタオルを巻き、右手にはアヒルのフロケット、左手に洗面器という出で立ちで突っ立っていた。

『き、きききき貴様ッ! な、ななななにをををを!』

『……まあ。ご主人様の巨峰はタオルの上からでもはつきりくつきりと形がわかりますね、ぽっ』

吸血鬼はお兄ちゃんの姿を確認すると咄嗟に自分の胸元と下腹部を手で隠し、狼狽えている。

一方、真性メイドは特に狼狽えもせず、ただただお兄ちゃんのブツに視線を向けている。

『こ、これは……な、何というしずかちゃん的なアクシデントでしょう……お兄ちゃん、びっくりです……』

『いちいち反応が白々しいんじゃないやボケエー！！出ていけ貴様あ！！』
『イタツアイタツ！ま、待って下さいメルちゃん……これは、その大人の都合というモノでして、ええ何とか条例という名の壁を乗り越えるために、並々ならぬエロゲー社員らの涙ぐましい努力の結果でして……』

『わけのわからんことを言ってるんじゃないわっ禿げえ！！氏ねっ、ちねえ！！』

吸血鬼は憤怒して、お兄ちゃんに洗面器やら石鹸を投げる。

お兄ちゃんはお兄ちゃん、自分の身を守るために四つん這いで攻撃を防いでいる。

『（ここは流れるに真性メイドの私も……）キャー、オニイチャンノエッチーヘンタイドスケベー』

『アッ、イヤッソンナッ、フタリニセメラレタラオニイチャンイッチャ』プツッ

「……以上が今回の対象者、お兄ちゃんの人となりを示した動画でした」

「ち、ちくしょおおおおお！！あ、あんのメガネエエエエエエ！……」（奈落の愚者A）

「もうちよつとだったのに！もうちよつとであたいイッチャウところだったのに！くやちい！！」（奈落の愚者B）

「ユツリユリにしてあげゆ！ユツリユリにしてあげゆ！」（奈落の愚者C）

「メルたん、ちゅばちゅば」（長老）

突然の来訪者のお兄ちゃんに奈落の愚者らは一様にして殺意と、こみ上げてくる色々なもどかしさに絶望を味わっていた。分かりやすく言うと、くしゃみが出そうで出ない、アレと同じようなものである。

「ちゆるんちゆるん……で？名波君、今回の対象者について何か分かったことはあるのかの」

「はい、我々は前回からメイド、吸血鬼、アイドルといったシスターズを対象者に仕向けましたが……分かったことはひとつ。今回の対象者は『とつても変態さん』な人ですね」

「……」

……いや、それは分かってるよ、と思っけていても口に出す者は一人としていなかった。

実際のところ、それ以外は特に何も進展しなかったのが事実である。

「彼の変態歴を箇条書きしておきます。軽くネタバレですので、読み飛ばしもオッケーです」

リアル妹の尻をぺんぺんもとい愛撫

リアル妹に孫の手で調教（未遂に終わる）

ロリ妹に頭を愛撫（その前に色んなところを愛撫しようとしていた）

タオル一枚姿のリアル妹に孫の手でナニかをしようとしていた（未遂に終わる）

お風呂上がりロリ妹に必要以上にミルクを薦める

巫女妹が入浴中に、魔法をかけてを歌いながら浴場に入場

リアル妹にパンパン丸発動（未遂に）

巫女妹の攻撃に対してM属性発動

巫女妹がトイレ中に、普通にトイレのドアを開ける

AKIBAでリアル妹の前で公開羞恥プレイ（魔法処女まじかるプリンの変身シーン）

メイド喫茶でメイドの生足を視姦

メイドのにほいつきタオルだと思い込んでふもふ

リアル妹に初体験発言

リアル妹を引き連れて、エロ同人誌コーナーへ

リアル妹にエロ同人誌の内容を普通に語る

リアル妹におっぱい発言

メイド妹にマゾ犬発動

メイド妹の膝裏にちゅっちゅっ

メイド妹に好きな体位を尋ねる

メイド妹にお兄ちゃんと呼ぶよう強要

シスターズの下着を視姦

メイド妹の涙をぺろり

ロリ妹の口元のご飯粒をぺろり

ロリ妹に恥辱的な制服紹介

リアル妹の金的攻撃にアへ顔

NTRなエロゲー堪能

吸血鬼妹にブツを披露

吸血鬼妹にダ　チワ　フ発言

吸血鬼妹にスク水（リアル妹着用済み）提供

吸血鬼妹の吸血攻撃に目覚める

吸血鬼妹に妹になるよう強要

リアル妹と吸血鬼妹に脱衣を指示（未遂に）

リアル妹に陣痛発言（過去）

巫女妹が入浴中に、服をすり替え（プリンのコスプレ）

吸血鬼妹の歌声をズリネタにする

吸血鬼妹に自分の飲みかけを手渡す（未遂に）

アイドル妹の声をズリネタにする（過去）

アイドル妹に奇声発動

アイドル妹にアイドル発言

吸血鬼妹とアイドル妹とのさんぴー（勘違い）

シスターズを脳内でエロエロにする

変態の行を唱える

シスターズの前でセクハラ曲を熱唱

アイドル妹に人間便器（自ら）を提供

吸血鬼妹に肉棒を舐めるよう強要（未遂に）

アイドル妹をお姫様抱っこ

アイドル妹を誘拐（未遂に、勘違い）

入浴中のメイド妹と吸血鬼妹に飛び込み営業

「まあ細かいところを挙げればまだまだありますが、ざっとこんな
ものですね」

「な、何ちゆう男だ……」（奈落の愚者H）

「す、すごいことをやっているな今回の対象者は……アグレッシヴ
すぎるだろ」（奈落の愚者H）

対象者の変態経歴の凄まじさに億した奈落の愚者らはざわつき始め
る。

それもそうだろう。リア充もいるとはいえ、エロに対してそこまで
耐性のない彼らなのだから。

しかし、エロは大好きという何とも矛盾しているともいえるかもし
れない。

「ええいつ、鎮まれ、鎮まれい！とにかく、まだ今のところ情報は
少ないのう。とりあえず、名波君。引き続き対象者に妹を仕向けて
くれんかの」

「はい、分かりました老害」

「では今日のところはこれで解散っ」

奈落の愚者らは長老の合図とともに席を立ち、駄弁りながら暗室を退室していった。

そして、暗室には名波と長老の二人だけとなった。

「ところで名波君」

「はい？」

「ワシの肉棒を鎮めてくれんかの」ハアハア

「黙れ、老害」

お兄ちゃんと探偵妹

「お兄ちゃん！？また私の下着盗ったでしょ！？」

休日の麗かな午後を自室で温めの紅茶を右手に、エロス本を左手に、マロンを頭に携えて楽しんでいると突然、扉が開きました。その開けた扉の傍に立っているのは、邪鬼のような顔した僕のリアル妹、小夜です。小夜は今にも僕を襲ってきそうな佇まいです……残念ながら性的な意味で、ということではないですが。

「ビクッ……し、下着？な、な、な、何のことでしょう？」ズズ……

「めちゃくちやどもってるんだけど……ていうか、お兄ちゃんしかないし！うちの洗濯物の下着、みーんな無くなっていたんだよ！？」

「こ、コウノトリさんが持って行っちゃったんじゃないかな……？」

「嘘を吐くにも苦しすぎだよっ！さあ、お兄ちゃん！？今でも後でも許さないけれど、白状しちゃいなさい！！」

小夜は一気に僕との距離を詰めて、胸倉をつかみ問い質してきました。

う、うぐぐ……く、くるちい。た、確かに……僕は妹の下着愛好者で、触ったり、嗅いだり、舐めたり、時には食べちゃったりはしますが、盗るなどという下劣でおぞましい真似は絶対にしません。そんなことをすれば、妹が次に履く下着がなくなっちゃうではありませんか。僕は妹の困り顔を見て、楽しむなどという凌辱野郎ではありませんし、何よりこっさり裏で下着を楽しむ僕の美学に反します。つまりは全くもっての濡れ衣、ということになるのです。

「比奈の……お気に入りのクマの子クーちゃんぱんつも無くなつたのです……」

「き、貴様あ……わ、私の勝負ばんていを……こ、クロス。やはり貴様は私と相容れぬ存在……細切れにして、ぴらにあのえさにしてくれるわっ！」ジャキッ

「ご主人様……何も私たちに黙って、持っていなくても……。そんなことしなくても、ご主人様なら脱ぎたてほやほやのぱんてーをあげますのに……あつ、キャッ、イツチャッタ！碧、イツチャッタ！／＼／」

「こ、こらあ！？何で吸血鬼の私だけ下着じゃなくて、スク水なんてまにあつくなものを奪うんだあ！？な、何か色々と複雑だけど……とにかくっ、お気に入りが入ってたんだからなあ！？」

「な、何でアイドルのボクまで呼ばれたの……？か、関係ないし……」

何時の間にやら、お兄ちゃんである僕の部屋にシスターズが全員集合していました。

ふむ……被害は小夜だけでなく、僕の家に住んでいないアイドル林檎ちゃんを除いたシスターズにもあるんですね。

「うらやま、許せません……僕のシスターズのおばんちゅやぶらじやーを盗むなんて、許せません」

「盗人猛々しいってこのことを言うんだよね」

「……え、シスターズ？何それ。ボク、このメガネの人の妹じゃないし……えっ、えっ、えっ……？ボクがおかしいの……？これが、世界の常識なの……？」

小夜は僕をジト目で見つめ、林檎ちゃんは僕の家が初めてだからか戸惑っています。

うつ……小夜のあの顔は僕のことをまるで信じておりません。まづ
いす、このままではお兄ちゃんはシスターズにボコボコちゃんに
されちゃいます。それ自体は気持ちいいのでむしろ良いのですが、
シスターズのお兄ちゃんに対する信用問題に発展しちゃいます。う
うむ、こういう時こそ冷静にお兄ちゃん的な判断を……どうすれば、
信じてもらえるのでしょうか？

無論、一番良いのは下着を粗相した犯人さんを見つけてシスターズ
の前に突き出せば、万事解決でお兄ちゃんの株も跳ね上がるのです
が……。くう、しかしマンションの一室でしかもこの部屋は最上階
に位置します。どうやって、犯人はベランダに侵入したのでしょうか。
それこそ、怪盗的な人でなければ……。

「……いいでしょう。皆様はどうやらお兄ちゃんを疑ってらっしゃ
るようです。ではお兄ちゃんが必ずや下着をドロボーした犯人を
見つけて無実を晴らして見せましょう……」

「……え。いや、別にそんなことなくていいし。犯人はお兄ちゃ
ん。だから早く出しなよ。今なら全殺しで許してあげるから」

自分ではちよつとカッコいい台詞を言ったつもりなのですが、小夜
は『はあ？お前何言ってるの？アフォなの？氏ぬの？』みたいな顔
して、ドギツイ視線をお兄ちゃんに浴びせてきます。おふう……た
まりません、が、どうしましょう……お兄ちゃん、とっても大ピン
チなのです。

「その人ははんにんじゃありません。下着ドロの犯人は別にいま

すです」

突然、かあいらしい子猫ちゃんのよおな声が室内に響いたので、声の発信源へ向くと、僕の部屋のベランダの柵格子に右足だけ引っかけベランダの内側によじ登ろうとしている一人の美少女がいました。

「ぎよっ……え、何してるの？この娘……ていうか、何なのこの状況……」

「……下着ドロの犯人はそこの人以外の別の人です。ですが……その前にヘルプミーです」

小夜は可哀想な生き物を見るかのような瞳で目の前のベランダ美少女を見ています。

赤と黄のチェック柄のリボン二つで結んだ金髪のツインテール、茶色のトレンチコートにリボンと同じ柄のスカート、茶色の探偵ハットと時代錯誤……というより、少し渋めのチョイスが際立っているちよつと第一印象は変な子、と言ったらよいのでしょうか。しかし、お兄ちゃんは普通な子も、ひんぬーな子も、きよぬーな子も、変な子もイケますので全然大丈夫です。

「ふっ……危うく、敵組織の罠に嵌まり、危うく転落死するところだったです」

シスターズの力により助けられたベランダ少女は一息ついて、僕のベッドに座ります。

ふむ……。いくら僕がイケても、彼女の正体は何なのか知る必要が

あります。しかし、敵組織とは何者なのでしょう……。しょつかー的な人達でしょうか……。あるいは、ニーティスト（ニートの最上級）……オナスト（オニーをする人）、アナニスト（アルが大好きなおホモ達）、ううむ僕の頭ではここまでしか思いつかないですね。とにかくすごい人達なのでしょう。

「ね……君、誰？私、桃井林檎っていう声優なんだけど。そんな古臭い格好した子、うちの事務所にはいないけれど……」

「……私の恰好が古臭いだなんて、失礼なビッチですね。っーん」

林檎ちゃんは彼女の渋めのファッションが気になったのか、僕が彼女に言葉責めめとい質問責めをしようとする前に、彼女に近寄り、ジロジロ身体全体を舐めまわすように見つめ、尋ねています。

「び、ビッチ、ボクが！？えっ、どこがなんで！？ていうか、ビッチって言われたの生まれてこの方、君で二人目だよ！？」

「くんくん……探偵は匂いで分かります。貴方は処女じゃありません……相当使い込んでいますね？年齢を偽っているようです……さては三十路超えですね？」

匂い……ですか。

確かに俗に言われる探偵さんは洞察力や観察力が長けていることは勿論のこと、五感にも敏感とも言われますし。

「……………くっ、こ、このっ」ぷるぷる

「けっけっけ、バーカバーカ！！ビッチのくせに偉そうにするんじやあないのだビッチビチィ！！」

「う、うるさいっ！！あんだなんか二百超えのババアじゃない！！ばかぁー！！」

「ひっ、ひわっ、や、やめふぉー！！ほっぺをつかむなぁー！！」

ぐにぐに

またもや、メルちゃんと林檎ちゃんは喧嘩をし始めました。

ふむ、しかし喧嘩するほど仲が良いとも言えますし、二人は互いに我が強いですが、それ故に心の奥底では繋がって……おっと、お兄ちゃん一瞬、イヤラシイ想像をしちゃいました。キャーいやらしいっ。

「……うむ、ところで君の名前をまだ聞いていなかったな。教えてくれないかな」

喧嘩で收拾がつかなくなった林檎ちゃんの代わりに、琴音ちゃんが聞きました。

「……あ、そうですね。ふりーの探偵、天莉あまりといいますです。あ、みなさんの紹介はいいです。知ってますので」

「え……な、なんでだ？」

「全ては匂いで分かりますです」

キラーンと輝いていそうな瞳で天莉ちゃんはそんなことを言います。ううむ、彼女はよっぽど匂いを嗅ぐのが大好きなのですね。そんなに大好きなのだったら警察犬になればいいのに……あるいはお兄ちゃんのペットの雌犬として……おっと、お兄ちゃん一瞬、イケナイ想像をしちゃいました。キャーえっち

「ちなみに、真性メイドである碧の匂いはいかなものなのでしょうか」

「一言で言いますと……『淫乱』ですね」

「まあ……イヤラシイ／＼」

「ふーん……で、天莉ちゃんはその匂いでお兄ちゃんが下着ドロじやないって判断したの？」

「ちゃ、ちゃん付けはや、やめてほしいです……子供みたいですから」

しばらく静観していた小夜が口を開きました。

「うむ？実際のところ、天莉ちゃんはいくつなのでしょう。見たところ、小学校高学年くらいにしか見えませんが、世の中には不思議なことに口りもどきという種族もいますからね。見た目で判断してはいけません。」

「そ、そうですね……このメガネの人からは童貞臭しかしません。何というかイカ臭い匂いですね……」

「アイアムチャンピオン」ドヤツ

「……最低なんだけど。ていうか、そのドヤ顔やめろ。何かムカつくから」

しかし、僕の無罪を主張してくれるのは大変ありがたいことです。天莉ちゃんにはあとで僕のサイン入りのトランクスをお送りしましょう。

「何より……現場には奴の匂いが色濃く残っているのです」

「奴？奴とはなんだ？」

琴音ちゃんは真剣な表情で天莉ちゃんに聞いてきます。

「奴とは私と永遠のらいはる……怪盗Gです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6245m/>

お兄ちゃんと妹のすゆことぜんぶ。

2011年7月2日15時44分発行